愛歌～アイノウタ～　（文化祭編）

来海ララ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛歌～アイノウタ～　（文化祭編）

【Ｎコード】
Ｎ４６１６Ｋ

【作者名】
来海ララ

【あらすじ】
何で、好きでもない人と同居なんか…。
少年の気分は憂鬱だった。文化祭編連載中！とかいいつつ、あんまり文化祭を満喫してる感はありません、ご了承下さい…

そんなこんなで少年達　アーンド　先生達！の同居物語。
始まり始まり～

琉峡☆

僕の名前は投坂　琉峡って言います。中2です。
高1の至軟ってお兄ちゃんがいます。凄く仲良しです。
でも…。
今日は最悪な日。
両親が海外旅行で何年も帰ってこないと知りました。
もう、今頃はニューヨークです。
お兄ちゃんは料理出来るし、学校の方なら校長先生が面白い事大好きで、許可をおろしちゃった。
それだけなら、全然良いんだけど。
お兄ちゃんの友達がすっごくお金持ちで、家を建てて。
そこに皆で住む事になったんだ。
むしろ良い展開なんだけどね。その友達の一人に、僕と全然気の合わない憂麻って高1の人がいて。
…その人と同室になっちゃいました。
えへ（＊―＊）
見た目は、綺麗。凄く綺麗。初めて会った時、見とれちゃったもん。
ドSだけどね…。誰にでも優しいのに、僕に対しては意地悪。
そんな人と同居。同じ部屋。
しかも今日から。
両親もその方が安心だって言うし。
もう！勝手に決めちゃうんだから。

そんな訳で、僕の悪夢の同居生活が始まりました。

設定　1☆

ややこしくなりそうなので、設定をあげようと思います。それぞれの性格が恋愛の仕方に激しく出るので、それを中心に紹介していきます。

名波（ななみ）　憂麻（ゆうま）　高１　身長：１８０ｃｍ
双子の兄。かなり鬼畜な所アリ。好きになった人に対してはその鬼畜っぷりが度を越える。
好きになるととことん好きになり、嫌いになるととことん嫌いになる単純野朗。意外に不器用。溺愛派。

名波　麻矢（まや）　高１　身長：１７７ｃｍ
双子の弟。基本誰にでも優しいが、好きになると少し意地悪になる。毎回馬鹿な会話を繰り広げる憂麻と至軟の仲介という哀れな役を担っている。純愛派。

＞ｉ２３２８７＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞８１９＜

砕楽＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞くだらく＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞　類香（るいか）　中３　身長：１６５ｃｍ
領可のいとこ。温和な性格で、いつもふわふわしているムードメーカー。
好きな人の事になると性格が豹変して凄い事になるつかみ所の無い子。純愛派。

砕楽　領可（りょうか）　中３　身長：１６３ｃｍ
類香のいとこ。元気でいたずら大好き。一番の美脚。
常に至軟といちゃこらしてリップサービスだ何だ言うが、下心ばりばり。純情そうに見えて実は結構変態。純愛派。

投坂（とうざか）　至軟（しなん）　高１　身長：１７２ｃｍ
琉峡の兄。目に見えて変態。趣味は領可の美脚観察。せっそうなし。脳内が年中やましい。おっかない親に厳しく育てられたわりには効果なし。狂愛派。

投坂　琉峡（りゅうき）　中２　身長：１５３ｃｍ
至軟の弟。馬鹿正直。あまりの可愛さによく誘拐されていたため、おっかない親に武術を取得させられた。二つ名は比成の猛者姫。溺愛派。

＞ｉ６５０６｜８１９＜

調子に乗って……。だいぶ前に描いた領可の女装ですｗｗ

まだまだまだ増えていきますが、最初はこの位。

憂麻☆

一言で言ったら、憂鬱。そしてイライラ。
それが今のオレの気分。

いろいろ事情があって、三つの兄弟と同居生活中…。
んー、詳しく言えば、名波家、砕楽家、投坂家の両親が…急に海外旅行に行ってきます的な感じで…。
ちょうどオレ達（憂麻、麻矢）の誕生日だったから、誕生日プレゼントを口実に家を両親が建てていった、と。
金なら有り余る程あるからな。

と言うのも、実は名波家は財閥。その名を日本だけには止まらず、世界中に知らしめている。
だから家なんて建てていった訳だ。

まぁ…そこまでは、良いとしよう。
良いとして…部屋は三つ。自然と二人一部屋となる。
最初は身内で、となったんだけど…至軟と領可が凄い仲が良くて、駄々こねてこの二人はすぐに部屋が決定した。そして麻矢が最近キレ気味。…相手を出来るのが類香しかいない事からここも決定。

そして、残りのオレとあいつが同室に。

正直、信じられない。

オレとあいつがすげぇ仲悪いのは皆知ってる。
なのに、この組み合わせ…。
どう考えてもおかしいだろ！！

そのせいでさっきからケンカばっか。
「何でオレが憂麻と同室なんだよ」
「うるせぇな。それはこっちも同じだ、おチビちゃん」
「なっ…！」
小さいと言われるのは、琉岐にとってこれ以上無い屈辱。悔しさから、顔を真っ赤に染めて俯いてしまった。
ふん、これで済むと思うなよ。

憂麻、ドSスイッチオン。
「って事は…これも小さいんじゃ無いの？」
「やっ…！」
急に琉岐のズボンと下着を一気に下ろして、それを露にする。
「やっぱり」
「や…やっぱりって…」
突然の事にそれしか言えず、立ち尽くす。
その様子に得たりとばかりに下半身を露にしたままベットへ担いで行った。
「な……何する、っ」
「性行為」
「…ぇ…」
「そのまま。お前ウザイからお前のハジメテを奪ってやる」
どうせハジメテなんだろ、こーゆーの。
耳元でそう囁いてくる憂麻は確信していた。絶対に。
「や…離してよ」
「嫌。誰がお前のいう事なんか聞くか」
ドカッと琉峡を躊躇いも無く押し倒す憂麻。
その瞳は嘲りのようなものに満ち溢れていた…。誰も、助けになんて来てくれない。

領可☆（前書き）

サブタイトルの通り、領可の章です。
あの二人の事は、今せっせと格闘してる最中です。
（私とキャラが）

領可☆

「あははっ、何だ、最初から決まってたのかよ」
「そう。麻矢と企画してた」
というのは、部屋分けの話。
憂麻と琉岐の仲の悪さは、皆の通う比成(ひなり)学園でもかなり有名。（比成学園は中学、高校、大学が全部詰まったお金持ち学校）
だから、わざと部屋を一緒にしたのだそうだ。
「麻矢は別に機嫌悪くないし、オレはお前となりたかったのは事実だし。だから半分本当、半分ウソ」
「なるほどな。まぁいいや。オレもそうだから」
「それはありがたい」
「何かどっかの恋人の会話みたいになってるぞ」
くすくすと笑いながらそんな会話をする至軟と領可。でも実際それ位この二人は仲が良い。
やはりこれも学園では有名な話。
「いっそなっちゃうか」
「あ、いいかもな。あははっ」
こんな会話も日常茶飯事。
おかげで周りの女子が興奮して恐ろしい会話を始める。
これもいつもの事。
比成学園女子生徒は、一言で言えば最強。腐の付く女の子が凄い集合した感じ。
そんな中、サービス精神旺盛なこの二人は校内でいちゃいちゃしている事が多い。
裏ではいつくっつくかの賭け事まで行われているとの事。
あー、恐ろしい。
そりゃ、至軟は綺麗だし、色気もあるし。で、相手が何でオレ？
「てゆーか、ベットが何で一つ？」

「ダブルベットだからだろ」
「何でダブルなのかって話だ」
「あ、そっち」
この事については、憂麻に聞いておいた。
「ほら、麗奈(れな)ちゃんの仕業。ちなみに防音設備までしてあるらしい。各部屋しっかりと」
「…何させる気だ、あいつは」
麗奈とは憂麻と麻矢の姉。高3。比成学園最強女子のボス格みたいなもんだ。そして恐ろしい奴は恐ろしい奴を呼ぶもので、生徒会長さんとも仲良し。
三崎(みさき)　花梨(かりん)。高3。学園の兄貴。女性だけれど、兄貴。彼女を知っていれば、理解が出来るはず。他にもいるけど、今はこれ位にしておく。恐ろしいから。
「何か、だんだん怖くなってきた」
「同感。寝るか」
「だな。お休み」
「お休み」
まるで修学旅行の夜みたいに盛り上がった二人は、とりあえず寝る事にした。

そして、事件らしき事が、翌朝起きた。
事件まで、あと6時間…

設定　2☆（前書き）

今回は女性陣です。

設定　2☆

あ、これ絶対ややこしくなるな。
とは私の独り言…。

女性陣紹介！

名波　麗奈　高３
憂麻と麻矢の姉。小さい頃さんざん弟達をいじめた。母ゆずりのナイスバディの凄い美人。ぶっ飛んだ性格。

三崎　花梨　高３
比成学園生徒会長。端整な顔立ちで、こちらは少し冷静にモノを考えるタイプ。
前髪パッツンがとても似合う。

椎名　甘音（あまね）　中３
比成学園で何か行事がある度にさまざまな萌え企画を考える。
美脚ロリ。

鈴払（すずはら）　亜美　中３
甘音と共に企画作成に明け暮れる。こちらは財閥一人娘。
美脚美人。

やはりこちらも女性陣まだ出てきますが、それはまた次に…。
出してみたいキャラのリクエストとかありませんか？
あったら是非とも…。
泣いて喜びます！目の下腫らします（笑）

至軟☆（前書き）

至軟、事件でピンチ（笑）

至軟☆

現在ＰＭ６：００

…ん？何か…何か、おかしい。

…え？

えぇぇぇぇぇぇ？！！

朝から騒がしい至軟。
無理も無い。事件は、既にこの時起きていたのだから。
と、言っても他の人にとっては「え？あぁ」位なのだろうが、至軟にとってはとんでも無い事だった。
いや、むしろ嬉しいけど…でも、これは……

朝から領のハグって！！！
しかも本人寝てるし！！！
寝顔めちゃくちゃ可愛いし！！どうしよう！？

その事件とは、朝早くから領可から至軟に送るハグタイムだった。
実は同じ部屋になった理由には、下心もあった。
つまりは、至軟は領可が好きだった、と…。
おもいっきりぎゅむぎゅむと抱きしめてくる領可。（本人無意識）
おもいっきりぎゅむぎゅむと抱きしめられる至軟。（下心ばりばり）

嬉しいけど…何か、下の方が恐ろしい事になってきた……。
早く起きて欲しいけど、起きて欲しくない…。複雑な心境だな……

…。
ついには寝言まで言い出す始末。
「しなぁぁん…」
むにゃむにゃ。
「ちゅー…してぇ…」
むにゃむにゃ。
わぁぁぁぁぁ？！！！
「ゃ…あ…」
何してんだ、夢の中のオレ？！
羨ましい！
「領…出来たら起きないでくれ…」
最終的にはそう落ち着いた。けれど至軟の淡い願いもすぐに破れ…。
「あ、至軟…おはよう」
にこぉ。
わぁ！頼むから笑うな！可愛いから！！さらに抱きつくな！！欲情するから！
絶対に下だけは向くな！欲情してるってばれる。
「あれ？朝から元気だなぁ」
「わぁぁぁ！！」
ばれちゃった。
片やにこにこにこにこ。
片や汗だらだら。
「いや…その…」
「弁解なんていらないぞ」
「うっ…」
そして大胆にもそれを握りこんでくる領可。
「わぁぁ…！」
「あははっ」
笑ってるし。極上の笑顔で！！
「仕方無いなぁ。オレが　　してやるよ」

「え……？」
今、何て？
思わず、自分の耳を疑ってしまった。

憂麻×琉峡☆

「ぁ…やだっ、離してよっ」
琉峡は必死に懇願するけれど、そんな願いを聞いてくれるはずが無い。
両腕を頭の上で拘束され、両足を憂麻の長い腕で持ち上げられ…。
とにかく凄く恥ずかしい体勢にさせられた。
抵抗しても逃げられなくて…少し前だったら抜け出す事だって簡単だったのに。
可愛い容姿とは裏腹に、比成学園の猛者姫として知られる琉峡。
空手から柔道から剣道からさまざまなものを究めている。
小さい頃から可愛かった琉峡は、女の子と間違えられて誘拐されたり、嫌な事をされたりが多々あった。そのため両親が自分の身は自分で守れるよう、習わせたのだ。
それは今まで役にたってきた。
でも…今は無理。体が動かない…。全然いう事をきいてくれない。
「やっ…ぁ…、だめっ」
「駄目？ウソだろ。こんなに感じてるのに」
意地悪に笑った憂麻は、口の中でそれを巧みに犯してくる。
早くも琉峡の急所を見つけたようだ。一定の場所ばかり攻めてきて…。
憎くて仕方無い人に犯されているのに、なぜかそれが自然に思えてしまう。
それに…気持ちいとか思ってるオレはおかしいのかもしれない。
「ぁっ、あ、イくっ！」
「じゃあ、イけよ。お前感じてる顔は可愛いから」
かぁっと頬が真っ赤に染まる。
信じられなかった。今まで憎まれ口ばかりたたいてきた憂麻に可愛いって言われた位で、気分が上気してしまう。

そんなの、信じられない！！
嬉しいとか思ってるオレは、きっと変なんだ。早く正常に戻らなきゃ！！
懸命に快感の世界へイかないよう、何とか自分を繋ぎとめる。
けれど…
「あぁ…もう…っ！」
ぼろぼろと涙をこぼしながら、琉峡は憂麻にイかされてしまった…。

琉峡は琉峡で、嬉しいんだか悲しいんだかよく分からなくなっていたけれど。
憂麻は憂麻で自分に無理矢理イかされてしまった琉峡を見て、たまらなく可愛いと思ってしまっていた……。

これは、恋なのか？

二人の思っている事は一緒だった。

至軟×領可★

正直、至軟はかなり領可の言葉を疑っていた。
だから、思わず問い返してしまう。
「何て…言った？」
そう言うと領可は凄く恥ずかしいそうな顔をしながらもう一度言ってくれた。
「だから、至軟のそれを、オレが……慰めるって、言った」
今更のように領可は自分の言葉の恥ずかしさに気付いたのか、真っ赤な顔をしながら俯いてしまった。
そんな様子が凄く可愛らしくて…下心ばりばりな至軟にしてみれば、たまらないもの。
だから意地悪をしたくなって…。
「それはつまり、性行為をしてくれるって事か」
「そう…。や、別に嫌なら…ってか嫌だよな。変な事言ってごめん」
至軟の下腹部から手を離して、必死に弁解をする。
けれど至軟にしてみれば既に手遅れで…。
領可の腕をつかんで再度自分の下腹部に戻す。
「嬉しい」
「へっ？」
「だから、お前がオレの体に触ろうとしてくれた事とか、嬉しい」
「っ…！」
「しよ…な？えっちな事しよう」
オレはしたい…してくれるんだろ？
耳元で甘い吐息が漏れる。
その感覚がたまらなくて、至軟に抱きついてしまった。
この時下腹部が凄い事になっていたのは、至軟だけで無く…領可もそうだった。
「する…」

「ありがと…それなら、オレは領を好きになって良いか？」
「……良い！好きになって…オレも好きだから」
実は両想いだったと今更気付く二人。
それがあまりにも嬉しくて…お互いをぎゅっと、抱きしめあった。

至軟×領可★（後書き）

まだ、未遂です。
次回…しちゃう予定です…。
出来るところまで頑張ってみようと思います。

至軟×領可☆

「しなっ…んっ、あ……！」
領可が至軟のそれを慰める、という事になっていたはずがいつの間にか立場が逆転してしまい…。
結果、領可のそれを至軟が慰めるという状態になってしまった。
「待って…まだ至軟…してないっ…」
「オレはもう大丈夫だから。領がされれば良い」
ほら、もうこんなに感じてる…。
軽く触っただけなんだけどなぁ…。
あまりにも可愛くて、愛しくて、恋人になれた事が嬉しくて…それを伝えるべく、領可を優しく犯していく。
「ハジメテなんだろ。優しくしてやるから…」
「や…それは、良いけど。やっぱ恥ずかしいって……」
「それは、まぁ仕方ない」
ダブルベットに領可を座らせて後ろへ回り込み、下腹部のその場所を至軟の長い指が行ったり来たりする。その様子が目から離せなくなってしまった時点で、領可の欲望は爆ぜてしまった。
「あっ…ごめん……」
「良い。最初からフルコースでいったら、後の楽しみがなくなるからな」
「うん…ごめん」
「だから良いって」
しゅんと俯く領可の頭をわしゃわしゃと撫でながら抱き寄せて、少しだけ意地悪な事を…。

だから、これからはもっともっと覚悟して。
こんなもんじゃ無いんだぞ、オレは。

かぁっと頬を赤らめながらも、至軟の心地よい声をうっとりと聞いている。
「返事は？」
「はい…」
よしよし、いーこだな。
「オレは犬か！」
「違うって。オレの大事な宝物って所だな、うん」
「よくそんな恥ずかしいセリフ言えるよな…もしかして、オレの事ナンパの対象としか見てないだろ？！」
「だから違うって。そんな事言う子にはお仕置きが必要だな」
っへ？
「ぁっ…ふ、はぁ…ゃ…」
急に唇を押し付けてくる至軟に対して、どうしても動揺が隠せない。
それでも、何か凄い気持ちくて…。
至軟のキスに、しばらく酔いしれていようと思った。

朝から疲れる一日　麻矢、類香★

何て言うか…、皆おかしい…。
だ、だよね。麻矢も思った？
思った…。

麻矢と類香はそんな会話をひそひそとする。

琉峡は憂麻と顔を合わせる度に真っ赤になるし。当の憂麻も何だかそわそわしてるし。
至軟と領可はいつも通りいちゃいちゃしてるけど…こー、何か周りに薔薇が飛んでるというか…。
会話、一部抜粋…。

「今日は何したい？」
「う～、あんま意地悪すんなよ…」
「分かった。する」
「っ、おい！何だよ何だよ、至軟のばか、へんたい！」
「何とでも言え。オレはオレの道をいく」
「どんな道だよ！！」
「だから、抉ったり、貫いたりそれから」
「わぁぁあ！！それ以上言うな！！！」
「愛撫したり、とか」
「っ……！もういい。オレの負け…」
「そうか。なら今日は学校休んでずっとベットでいちゃいちゃ」
「それは駄目だ！カップリング探知機備えた、かいちょーと麗奈姉に何されるか分からない！！」

……備えてなくてもそーゆー関係になったのは見え見えだって。

麻矢…あの二人くっついたんだね。
当然と言えば当然だな。至軟は領口説き落とす気満々だったし…。
あ、領は至軟に気があったみたいだよ！
そうか…。なら、本当に当たり前だな…。
うん。領が嬉しそうだから、オレは良いんだけどね。
でもあのいちゃいちゃはどうにかならないもんか…。
…多分、
『無理』
だな。
だね。

はぁぁ…思わず二人そろってため息をついてしまう。
「何だ？麻矢と類、疲れてるのか？」
そんな事も知らずに領可が問いかけてくる。
「さっき疲れた。今も疲れた」
「はい？」
「うん。その通りだね…麻矢、早く仕度しちゃおう」
「そうだな」
何だか、朝から凄く疲れたな…。
絶対学校行っても苦労するよな、これ。
頭の上にハテナマークを沢山乗せた至軟と領可を残して、麻矢と類
香は学校という戦場に行く準備を進めた…。
どたばたな一日が、今日も始まろうとしている……。

麗奈、花梨★

「くす…あの二人、くっついたな…」
「ホント。花梨…文化祭が楽しみねぇ…。甘音と亜美は何て？」
「企画の方はもう思いついたらしい。で、衣装をお隣の比等(ひなと)学園のあの二人に考えてもらうだけだって」
「流石…用意周到じゃない」
学園の美人二人組み、けれどどこか勇ましい姿から『萌え萌えブラザーズ』と呼ばれる麗奈と花梨は、くすくすと楽しそうに笑いながら、廊下を歩いていた。
「さぁ、では全校集会を開きましょう。…あ、演料(えんり)ちゃん先生、瑞南(みずな)先生。全校集会を開きたいのですが…」
「へぇ。その様子からすると文化祭の事？」
「はい。今年のメンバーを決めようかと」
「分かりました。こちらでなんとかしておきます。先に体育館へ行っていて下さい」
「はい」
「えーと、理事長の携帯番号は…」

早速瑞南の言ってくれた通り、体育館へと向かう。
その二人の表情は、とても明るいもので。
その様子から何かが始まるんだと、周りの生徒は理解した。
そして、あの六人の少年達の背筋を、何故か冷たいものが走った。

設定　３★

今回は先生達です。ちなみに全員男性（笑）

園原（そのはら）　演料　３２歳　身長：１８５ｃｍ　担当科目：社会
かなりドＳな先生。子供っぽい所があり、授業中脱線したりネクタイで遊び始める時がある。けれどその恵まれた容姿や、自分達の目線で話してくれるような所で生徒には好かれている。

笠原　瑞南　２３歳　身長：１８０ｃｍ　保健室の先生。別名、純白の天使。白衣だから。
こちらはドＭ。演料の子供っぽい発言によく突っ込んでいる。人が良い。瑞南目当てで保健室に行く生徒が多々いる。

羅槻（らつき）　妃琉（ひりゅう）　３０歳　身長：１８４ｃｍ　担当科目：理科
無口。けれど冷たい事は無く、根は凄い優しい。どっちかって言えばＳ。

片霧（かたぎり）　唖摺（あずり）　２８歳　身長：１８２ｃｍ　担当科目：数学
凄い毒舌家。けれど好きな人にはとことん優しいところがある。黒縁眼鏡愛用。

他にも出てきます（笑）

悪夢の文化祭?!★（前書き）

文化祭ネタ、やりたかったんです（笑）

悪夢の文化祭？！★

そして３０分後…。
体育館は中等部、高等部、好奇心に負けて来た大学生で満ち溢れていた。
どこまでもフリーダムな比成学園には、整列という言葉が存在しない。そのため先生も生徒も思い思いの場所に腰をおろしていた。
「比成学園のぶっ飛んだ伝統、文化祭でホストクラブとメイドカフェ、今年も開催！！」
花梨のその言葉に、一気に盛り上がる。
そんな中、あの六人は固まって座っていた…。
「恐ろしい…頼むから今年は選ばないでくれ！！」
「全くだ。こっちは毎年被害にあって飽き飽きしてるんだ…」
「そうそう。至軟なんてさ、去年熱出したもんな。オレ見舞いに行って一日泊まった記憶あるぞ」
「…最後、領も熱出したんだよな」
「あははっ。オレも覚えてる」
至軟の言った通り、実はこの六人選ばれなかった事が一度も無い。毎年被害にあいっぱなし。
さて、今年はどうなるものか。
「えっと、もうそれぞれ相応しい人材は誰か、のアンケート書いてきましたよね。今から集計しますので、各クラス委員長は集めてきて下さい」
とにかくフリーダム、とにかく生徒の手で！をモットーにしてきたこの学園ならではの行事、文化祭でホストクラブ＆メイドカフェ！面白い事大好きな先生と歴代校長に守られてきた変わったこの行事。世間一般のウケもかなり良い。
「あらぁ、皆おそろいで」
…甘音、だな。

この声の持ち主は椎名　甘音。そして甘音がいるという事は亜美もいるという事。
「自分達が選ばれない事を願ってるようだけど、それは無理よ～」
「…何で言い切れる？」
「だって、少なくとも私のいるクラスは皆あなた達の名前書いてるし、麗奈姉のクラスもそうらしいし、花梨のいる所もそーらしいし」
「私の情報網からいくと、大半の人があなた達の名前書いてるから」
「おほほ～」

…おほほ～、じゃねぇ。何だって？甘音と亜美の情報網では大半がそう書いたって？

「それはつまり、決まりだ、と…」

「そーだね、うんうん」
「私達の情報網をなめてもらっちゃぁぁ、困るのよ」
「なめてねぇ！！」
誰がなめるか。お前らの情報網を。

甘音ちゃんと亜美ちゃんの情報網でそうだって言うんだから、そうなんだろうな。
うわぁぁ、恐ろしい、恐ろしい！！

至軟と領可は目で会話。

実はこの二人、学園一の情報網を築き上げてたりする。多分この二人に学園の事で知らない事なんて無いと断言出来る…。
どうやら、悪夢の文化祭は決定のようだ…。
さよなら、楽しい文化祭。こんにちは、悪夢の文化祭……。

麻矢と類香は目を合わせると、はぁ…とため息をついた。

麻矢×類香★

「あ、麻矢。ただいま」
「おかえり。今日はさんざんだったな」
「全くだよ…」
はぁ…とまたしてもため息が零れる。本日3回目…。オレ、相当疲れてるのかも。
「類…」
「ん？」
「おいで…。疲れてるんだろ？癒してやる」
どうやら麻矢には全てお見通しらしい。ここは好意に甘えておこうと思った。
麻矢の傍へ近寄ると、ぐいっと抱き寄せられる。
イスに座っている麻矢の足の上に抱っこされる状態で、少し恥ずかしいけど…、でも本当にこうしているだけで癒されてしまう。
皆には内緒だけれど、この二人はとっくにできていた。
頭を麻矢の胸元に寄りかからせて、ぎゅっと抱きしめる。そうすると、抱き返してくれた。
それが凄く嬉しくて、もっともっとぎゅっと抱きしめると、顎を持ち上げられて今度は唇にキスが返ってくる。頭を押さえ込まれて深いキスとなってしまった。唇の端から唾液が滴るのにも構わず、口の中に舌を押し込んでくる。
「ぁ、ふっ…」
少しばかり息が荒くなってしまって、キスだけでこんなにも感じているんだと自覚させられてしまって。けれどそれは麻矢も同じなんだと気付いた時は、何だかきゅっと胸が締め付けられるみたいになって…しばらくすると、やっと解放してくれた。
「感じてる…」
「…え？」

「オレも…類も、同じくらい」
「っ、うん…！」
少し口下手な所がある麻矢に言われると、余計嬉しかった。
「もっとして」
ふわっと微笑みながら、嬉しさをかみしめて麻矢にお願いをする。
「分かった」
どこまでも純粋な二人は、いつも初恋みたいで。
不器用でも愛し合えているんだと分かった。

麻矢×類香☆

「っ！」
下肢の布を全て引き剥がされてしまった内腿を、ゆっくりと撫で上げられて敏感になった欲望が余計張り詰める。
その感覚にぞくぞくしていると、唇を貪られた。
「ぁっ…ふぁ…んっ……」
麻矢の白いシャツに震える手で必死に捕まる。すると指に麻矢の手を絡めて安心させてくれた。
何故かそうされるだけで嬉しいと感じてしまう。
ただ単純なのかもしれない。
まぁ、それでも良いけどね…。
内腿を行き来していた指先が、臀部へと上りつめてくる。
まさかそんな場所をじっくり触られるなんて思ってもいなかった…。
そのせいか、ぞくぞくする感覚はどんどん増していく。口の中では舌を吸い上げられ、甘ったるい快感が体中を支配していくのが自分でも分かった。
けど…気持ちいけど、もどかしい……。早くちゃんと触って欲しい。
そう感じ始めた頃に類香の欲望に麻矢が手を這わせてきた。
あまりにもジャストタイミング過ぎて、いい具合に焦らされた欲望がひくひくと反応してしまった。
「あっ、あぁん…」
感じ過ぎてあまりにも恥ずかし過ぎる声が出てしまう。
隠そうとしたけれど、無駄だったようだ。
「そんなに、感じてる？」
「…っ、だって…やぁっ…！」
「可愛いから、素直に感じて…。類…ここでいい？」
「ひゃぁっ…！」

「ここなんだ」
にこっと笑みを浮かべて、類香の欲望を揉みしだいていく。
類香の急所を完全にインプットしている麻矢は、的確に感じてしまう場所を突いてくる。
それが嬉しいやら、恥ずかしいやら…。
インプットしているという事は、何度も性行為をしているという事。
けれど気持ちいものは気持ちい。この快感に開き直って酔いしれる事にした……。

麻矢×類香☆（後書き）

なんか凄く長くなりそうな予感がしたので、これ位にしておきます。
その後はご想像にお任せを…。
純粋ってほざきながら、結構凄い二人です。

至福の時間　至軟と領可☆

「あ、至軟。帰ってたのか」
シャワーに立っていた時間約１０分。どうやらその間に帰っていたらしい。
「お帰り」
「ただいま」
そして今は着替え中のようだ。九月といえば完全に夏。そういう領可も私服に着替えていた。
しかもシャツ一枚。いるのは同居人だからといってリラックスし過ぎのようにも見える。
本人曰く、『暑いから仕方ない』のだそうだ。それにこれが夏の領可流部屋着スタイル。誰になんと言われようと変えるつもりは無いらしい…。
「あれ？至軟もシャワー浴びてたのか」
「あぁ。一階は領が使ってたみたいだったから、オレはこの階のを」
「そっか」
実はこの家、階ごとにシャワーとトイレがある。
全部で四階。一階はリビングやら何やら。
二階が憂麻と琉峡の階。三階が至軟と領可の階。四階が麻矢と類香の階。
中高生が暮らすには広過ぎなのだが、それは麗奈姉のおかげ…じゃなくてせいらしい。
けれど中高生といえば発情期…もとい、元気が有り余っている。
喘ぎ声をあげてもばれない…では無く騒いでも迷惑にならない広さ。
そういう意味では麗奈姉には感謝している。
「それにしても…至軟って脚長げーな」
「ん？そうか？」
「うん。羨ましい」

そして思わずじーっと見てしまう。
「領」
「え？あ、いや、ごめん！ぁ、えっと」
「あははっ。慌て過ぎだ。こっち来て」
「へ…何？…うわっ」
気まずそうにしながらそろそろと近づくと、ぎゅっと抱きしめられた。
「あのさぁ。その格好やめてくんない？」
「え、あっ、ごめっ…」
「何で謝るんだよ。欲情しちゃうからやめろって言ってるんだけど」
……？
しばらく理解出来ず。少し思考停止……。
やっと理解すると、ぼっと一気に赤くなった。
「自覚してないなら言うけど。領の生足って凄い欲情する。キレイって知らないのか？ならどんだけオレが欲情してるのか、体に叩き込めば分かる？なら今から凄い恥ずかしい事してやろうか。心配しなくてもすぐに気持ちくなれるからさ。大丈夫だか」
「わぁぁぁぁぁ！！ストップストップ！！」
「え？あぁ。具体的にな。だからお前のそれに直接ローションかけて、オレの掌で思いっきり可愛がってやるから。後は、お前の」
「わひゃぁぁぁ！！待て、待て待て！それ以上言うな！！」
「黙って欲しい？」
「うん…」
「なら、今言った事させてくれる？そうありがとう」
「まだ何も言ってないから！！！」
「させてくれないの？」
「……オネガイシマス」
「最初からそう言えって」
楽しそうに笑いながら黒髪のくせっ毛を手でわしゃわしゃってくる。

そうしてくれる事が何だか嬉しかった。
「それなら」
「ベットへゴーとか言うんだろ」
「大正解」
そして仕方ないなぁ、と凄く嬉しそうに言った領可は、至軟にベットへ押し倒された。

不思議な気持ち　憂麻×琉峡★

「……」
「……」
……どうしよう。凄く気まずい……。昨日、あんな事しちゃったから。
琉岐の頭の中に、ふっと昨日のいけないシーンが浮かんでくる。
わぁぁぁぁぁ！！！
凄い事しちゃったよ！！！
どうしよう、お嫁に行けない。じゃなくて、お婿に行けない！！
折角冷静さを取り戻したのもつかの間、すぐに頭の中はぐちゃぐちゃになってしまう。
おっ、落ち着け。大丈夫、きっと大丈…
「なぁ」
「わぁ、な…何？」
大丈夫じゃない…大丈夫って何？なんなの…。
「昨日……ごめん」
「へっ？え、あ、良いよ」
あれ？意外に平気。それに謝られるなんて思ってなかった。思わず良いよって言っちゃったし。
「あ、オレも何か…いろいろ言っちゃったし…。えっと、ごめんなさい」
「ぶっ！」

「ほえっ？」
急に噴出す憂麻。何、オレ何か変な事言った？
「いやぁ、謝られるとは思ってなかった」
「それはオレもだって」
あれ？何か打ち解けてきたし…。不思議とイライラしないし、それに……
「いー…におい…」
石鹸の香りがふわっと憂麻の方からしてくる。多分シャワーでも浴びたんだろう。
それは琉峡もだけれど。
誘われるように憂麻の方に近づくと、ぎゅっと抱きしめられて…。
あれれ？オレは何をやってるんだろ…。でも…何か、落ち着く。
その感覚は…
「お兄ちゃんみたい…」
「おいおい、オレは至軟の代わりかよ」
「ううん…違う」
お兄ちゃんみたいって言うのも何か違う。何だか落ち着くけど、心臓が暴れる。胸に甘いような何かが広がっていって、まるでこれは、恋？なのかな…。
そんな事を考えていたら、気付いてしまった。
心臓がうるさいのは、自分だけじゃ無い。
憂麻もだ。何でだろ…。
「もしかしたら、好きなのかも…」
そう呟いたのは、琉岐では無く憂麻。
「オレ、お前が好きみたいだ…」
「うん……え？」
今…何て言ったの？何て…
「好き。お前が好き。今まであたってたのは、自分の気持ちがよく分からなかったから。でも今分かったから、もうあたらない」
うそ…オレが好き？何で？何で？今までいっぱいいじめてきたのに

…。オレも、何で憂麻が好きなの？
何で？何で何で何で何で…何…
「ぅ…ぁあぁ…」
「……え？何で泣くんだよ、可愛いけど！」
「分からない。でも…言うなら…」
あえて言うならば、急にこんな感情になった自分が分からないけど、
言うならば…。
「嬉しい…から」
多分、いや絶対嬉しいんだ…。
凄く、不思議な気持ち…。

そしてそして…戦闘態勢　憂麻、麻矢、至軟★

「あ、あなた達の衣装決まったから。これね、はいどうぞ」
「ちゃんと着てね。じゃないとその服装で文化祭後は登校してもらう事になってるから。５日間、１日でも休んだらタダデハオキマセン。宜しくて？」
にこにこ笑顔で麗奈と花梨がそう言ってきたのは、今日の朝の事。文化祭まであと一週間…。女性陣は凄く気合が入っているようだ。オーラがメラメラしていて怖い。
もちろん本人達には言えないが…。
そしてこのハレンチな服装をデザインした二人が、ジュール（比成学園ホストクラブの名前。どこからこんな名前来たんだか）にＶＩＰで来るらしい。失礼の無いようにとか言われた。
無理だろうけど、一応返事はしておいた。恐ろしいから。

そして、今の授業時間になる。
「では、この問題を…。投坂くん」
「＊＊＊＊＊です」
「正解」
あちこちからよくこんな難問解いたもんだと拍手が飛ぶ。けれど至軟はほぼ無意識に答えたようだ。
多分、文化祭の事でも考えているんだろう。
そんな所にタイミング悪くだか良くだか、甘音と亜美が教室へやってきた。
「名波　憂麻く～ん、名波　麻矢く～ん、投坂　至軟く～ん、至急撮影室まで～。うふふっ」
うふふっ、じゃねえよ。
極上の笑みを顔に貼り付けた、甘音と亜美に呼び出しがかかる。甘音と亜美のファンもかなり多いので、周りまでどよめき始める。そ

して…どうやら悪夢の時間が始まるらしい。
『こっからは気力勝負だ』
『了解』
やはり目で会話をする三人。
席を立って、戦闘態勢を整えた。

そしてそして…戦闘態勢　憂麻、麻矢、至軟★（後書き）

さぁ、次から悪夢の時間です（笑）

悪夢の時間？☆

さぁ、では始めましょう。
にこにこと笑顔を絶やさずに麗奈がそう言うと、悪夢の時間が始まった。
何かとにかくハレンチな服を着せられ、ハレンチなポーズをとらされ。
その場にいたのは、憂麻　琉峡　至軟　領可　麻矢　類香　などのスホトクラブに選ばれた少年達。（ほかにも四人。合計十人）そして、メイドカフェに選ばれた　麗奈　花梨　甘音　亜美　などの十人の美女達。十二名のカメラマン。他十名。この十名の少女達はというと…。
どこからか本人達よりも早くこの撮影の事を嗅ぎつけて、一万円のチケットを買ったらしい。
十名限定の。
何でそんな事を知っているかと聞いたら、『私達の情報網も結構凄いんです』と言われた。
けれど訂正しよう。結構では無くかなり、だ。
本人達よりも早く知るなんて、その情報網…甘音と亜美にも並ぶんじゃ無いか？
そして今はその凄腕情報網の少女達とカメラマンに囲まれ撮影中。
そして別の意味で凄かったのは至軟と領可。
お前等リップサービスにも程があるだろう？！確実に限度を知らないパターンだ、これ。
「はぁい、至軟君はもっと領にくっ付いて！そう！！そのままチュー！！」
「「了解」」
そして本当に唇での接吻。
おいおい。

けれど不自然さは無かった。何故なら、領可が女装をしているからである。
今年のテーマは、女装と男装。
ホストクラブで女装。そしてその人をエスコート。メイドカフェで男装。そしてその人がエスコート、という訳である。
ちなみに女装は琉峡と領可と類香である。そしてカップリングは本当のカップルまんま。それが一番萌えるとか言われた。
まぁ堂々とイチャイチャ出来るから良いけど。
「うーん、じゃあ次は自由で良いよ」
麗奈から自由の許可が下りたという事は至軟達の撮影はあと少しという事。

自由だって。どうする？
ここはサービスと示して本当にイチャイチャしか無いだろ。
あ、だよな。

まるで二人の目の会話が聞こえてくるようだ。
見え見えだっつうの。
そして二人は実行に移すらしく、目の会話を終了。

「うーん。そうだな。じゃあ言葉攻めといこうか」
「あぁーん？そんなの聞いてないぞ！！」
「そりゃそうだ。今言った」
「いや、マジでやめろって」
どうやら領可は本当に知らなかったらしい。
「いや、だからオレはさ。お前をどっか閉じ込めてオレだけのもんにして人目さらさずお前の体にあんな事やこんな事をしてやろうかと。具体的に言えばぐちゃぐちゃにした後ろの蕾に指入れて急所にバイブレーションとかしてやりたい」
「わぁぁあ？！待て！！それ以上言うな！！！マジでヤバイ！！

！！！」
「後はそうだな。お前のアレを口の中に迎え入れてかき混ぜたりとかそれにさらにローションかけてやわらかくしてから」
「待て待て待て待て！！！」
「それからそれを」
「だぁぁあああっっ！！！」
「あはははっ」
あ、これはサービスじゃ無いな。自分達の世界に完全に入り込んでやがる。
そんなこんなで至軟の言葉遊びと領可の絶叫に聞き入る形になり今日の撮影は終了した……。

お誘い☆

「瑞南、残業お疲れ」
「あ…演料、居てくれたんですね」
「まぁな」
実は瑞南は新米教師。つまり、比成学園が初めての職場なのだ。
ほれ、と言いながら渡してくれる缶コーヒーを素直に受け取る。
疲れきった瑞南が缶コーヒーを飲むところを、演料は嬉しそうに眺めた。
「でも、演料も大変なんじゃないですか？新米教師のお世話役なんて」
どうやら瑞南は勘違いをしているらしい。
「いや…。オレが指導に付いたのは瑞南が初めてだ」
「あ…そうなんですか」
「そうそう。オレだって、どうせ家帰ったって誰もいないしな」
「え？そうなんですか？てっきり妻も子供もいるものかと」
「いない。結構寂しいもんだよな、一人暮らしって」
知らなかった。
演料は本当に綺麗だから。
「そうですね…。オレも、一人暮らしですよ」
「へぇ。なら、うち来る？」
「良いんですか？」
「いや、だから一人暮らしだし。オレが可哀そうに見えるんだったら、来てくれても良いだろ？」
演料は明らかに面白がっている…と分かっても、何故か引かれてしまう…。
「はい…行きます…」
ぽやっとしている瑞南の頭をぱこっと叩くと、演料が行くぞ　と言った。

お誘い☆（後書き）

今回は珍しく先生ズの話。

下心☆

「何でオレがお前を誘ったか分かるか？」
「へ？」
突然のその質問にあたふたしてしまう。
何で誘ったか？
そんな分からないって…。
真剣にうーんうーんとうなる瑞南が可愛らしく見えてしまった演料は
「好きだからだ」
「……？！！」
い、いいい今…何て？！何て言ったんだ、演料！！
「下心」
「…えっと、ぁ…」
「って言ったら、びっくりする？？」
「します！！」
何だ、からかわれたのか、オレは。
はぁっと何故かもれるため息。そして…何だろう、このガッカリ感。
「じゃあ、して？」
「……え？」
「お前ってさ、いちいち反応可愛いんだよね」
「…えっと……ぁ…」
「可愛い。だから持って帰りたくなった」
「ぅぅ……」
ぷしゅーと音を立てて顔から火が出ている気がする。
それ位、うれしくて、はずかしいセリフだった。
これも演料の中ではからかいでしか無いんだろうけど…何故か、かまってくれるのが、たまらなく嬉しいと思ってしまった。

二度寝☆

「さぁぁ！！文化祭、張り切っていくわよおおおぉ！！！！」
「……」
あれ？もう文化祭？
…は、早すぎる！！！てゆーか、オレと麗奈姉しかいない？！
「りゅーちゃあああん、今回の企画は女装よおおお！！！！！」
「わきゃあああぁぁぁぁぁ！！！！」
嫌だ、夢なら覚めて！いいから覚めて！！

「琉峡…」

…憂麻の声？でもここにはいないし…。

「琉峡…ほら…き…」

…今何て？何て言ったの？

「ほら、おき……りゅ…き」

何て？何て言ったの…？聞こえない…！

「ふぅぅ…」

「ひゃぁっ！」
耳元であったかい吐息。あまりのくすぐったさに飛び上がってしまった。
そこにいたのは、やっぱり憂麻。

て事は…。
「夢だったんだ……」
良かった…女装とかごめんだよ、流石に。……ん？女装？
『今回のテーマは女装よ、うふふ』
何故か甘音の声が脳裏に浮かぶ。
女装ようふふ？？

…あぁぁ…そうか、今年は女装…。
しかもフリッフリのメイド服を着ろとのご命令。

嫌だぁぁぁぁ（泣

今日、学校休んじゃおうかな…。

朝から憂鬱。もういいや、二度寝しちゃお。
憂麻はもう部屋をとっくに出ている。それを良いことに琉峡は初めての二度寝の気持ち良さを経験する事になった……。

賭け☆（前書き）

何故か始まる賭け事。ｉｎ職員室。

賭け☆

「おい、瑞南」
……。
反応無し。挫けずもう一度。
「おーい、瑞南さん」
……。
反応無し。
何と言うか…今日の瑞南は雰囲気がぽやーっとしてると言うか。いつもおっとりしてるけれど、同時にしっかり屋でもある。そんな瑞南が…ぽややん？
焦点の定まっていない視線は空中浮遊している。視えないものでも見えるのだろうか。
「…おい、演料」
「はーい？」
「お前、何かしただろ」
「いんや、べっちゅにいいい」
……いやいや、原因お前しかいないんだって。何よりも楽しそうなお前の表情が何かしたって言ってるんだよあんぽんたん。
妃琉はふぅ…とため息を漏らす。
朝の職員会議の時間に我が校誇る文化祭の話が出た。
瑞南はこのでっか過ぎるイベントを結構楽しみにしていたようだ。
まぁ、それは今年新しく入った職員だけにかかわらず、全職員が楽しみにしているのだか。
だのに、瑞南は上の空だった。
ぽっけーっとして女性職員のハートを奪うのみ。（それも問題だけど）
演料は演料でそんな瑞南を楽しそうに見守るのみ。（観察するのみ）
いつも漫才みたいな会話をしている二人の話し声がないと、普通の

会話ばかりで何だかとてもつまらない。
「唖摺」
「うん？」
「絶対何かあったよな」
「あった。あったに一万円」
「オレあったに三万」
「じゃあ、私あったに五万」
何故か賭け事の話で盛り上がる職員室。
「演料先生が瑞南先生を誘惑したに十万円」
「あえてその逆に八万円」
「何故下げる」
周りの職員も参加、何故かのイベント開始。
賭けの中心はやはりあの二人。
演料と瑞南は何もせずに今日も職員室を盛り上げてくれた。
うーん、流石。

喧嘩両成敗☆

「あれ琉峡は？」
昼休み、憂麻と琉峡が一緒に居なかった為そう聞いてみると、なんとも珍しい事にサボりだと言うのだ。
雪が降りそうな予感がする。
憂麻の前にとすっと腰を下ろしてじぃー、と見つめる。
「……何だよ」
「お前さ、オレのかわよい弟に手出しただろ」
「出した」
「……ほぉ、随分とはっきり言ってくれるんだな」
「お前には言われたくない」
とたんに憂麻の視線が厳しくなる。それに対抗する如く、滅多に人を睨む事をしない至軟も表情を厳しくする。両者共無駄に端整な顔立ちをしている為か、にらみ合いをしているだけでかなりの迫力があった。クラスメートにとって、迷惑以上に他ならない。その場所だけ近寄りがたい空気が流れていた。
けれどそんな二人に無謀にも近づく人影が一つ。もちろんにらみ合いに忙しい二人は全く気付かない訳だが。そしてその人物は机に飲んでいた缶コーヒーを置き。
「喧嘩両成敗」
ばこんっ！！
右手と左手それぞれに未開封の缶コーヒーを持ち、二人の頭を思い切り――容赦無くぶん殴ったのである。
「「ってー！！」」
「ふん、馬鹿共が」
しかもそうまで言い、鼻まで鳴らした人物は――――
「麻矢！！」

そこにはさけずむ様な表情をした、双子の片割れが居た。

どっちもどっち☆

「…で、かわよい弟にあんま手を出すなって？」
「そーそー。学校サボるような子じゃ無かったんだ！どうしてくれる」
「知るか」
ふーんだとかなんとか、子供っぽい仕草をしてそっぽを向く憂麻。
そんな憂麻を貞操を返せとわめきながら睨みつける至軟。
――早い話、どっちもどっちだ。
「至軟。そんな事言ったらお前もそうだ。お前とそーゆう関係になってから、少なからず領に影響出てるって」
「え、何で知ってんだよ！！」
「……見え見えだあほ」
麻矢までそんな事言うかよーくそー。
口の中でぶつぶつ呟きながら悪態をつく。そして大体な、憂麻。お前が――、と文句を言おうとして午後の授業のチャイムが鳴る。つくづく運の悪い奴だ。
不満そうな表情がよく見てとれる。それでも常識はあるのか自分の席に着いた。

噂の二人☆（ちょっと時間を遡ります）

時は放課後、場所は比等学園デザイン部の部室。夏も終わりに近い残暑の頃、そこには二つの人影があった。一人は、ふわふわとした亜麻色の髪をツインテールに結っている可愛らしい少女。比等学園中等部所属の中学二年生。歳相応の顔立ちの少女の名を神崎（かんざき）　麗（れい）という。

一人は腰辺りまでの長さの茶髪を揺らめかせて、亜麻色の髪の少女とは違った可愛らしさを堂々とたたえている。比等学園高等部所属の一年生にしては幼い顔立ちの――童顔と言うと本人は怒る――少女の名を野里（のざと）　樹李（じゅり）という。

デザイン部というと、数多くある部活の中でただ一つの部長が高校一年生という珍しい部活である。何故そうなったのかというと、この学園だけに関わらずすぐ横にある比成学園にまで噂がいく程の――とてもこの二人らしい行動力のあるもの。

校長室に知り合いやら友達やらを総勢八十人以上引き連れて『人数もいます内容も充実していますからどうか承諾の返事を』と追い打ちをかけた、というもの。

そんな行動力のある二人は何をしているのかというと――。

「やっぱりサンシャインの方が」

「いえブロッサム」

今人気大爆発中の某作について語りあっていた。それでも手の動きと目線は衣装作りに集中しているのだからたいした器用さである。

さて、この二人の作っている衣装というものはホスト役とメイド役の為に用意する物。ミシンで、時には手縫いで丁寧かつ迅速に衣装を仕上げていく。

「でもフレッシュも好き」

「分かる。でもハートキャッチだって」

最高にして最強な器用さを誇る二人は、某シリーズの大きいお友達

でもあった。それぞれの衣装が仕上がったら両方共ＤＶＤを借りに行こうという素晴らしい約束を取り付け、目線と手の動きだけでなく意識を集中させて、それこそ音速を超える勢いで作り始めた。

最高の文化祭を☆

『文化祭まであと五日！！』
正面玄関の日捲りカレンダーをビッと花梨はめくる。
――あと、五日な。
この学園の最大三大行事と言えば、体育祭、文化祭、そして男装女装コンテストである。男装女装コンテストは七月の下旬に無事終了。男装の部は副会長麗奈の、女装の部は双子の大勝利で幕を降ろした。つまり名波家が優勝を総取りしたのである。体育祭は九月の半ばに、こちらも無事終了。
残りの最大行事は文化祭のみ。
「ふぅ……」
大仕事があと一つ。
「……あと、一つだけ」
ここまでが長かった。長かった分、思い入れも沢山ある。
だからこそ悲しいのだ……一つという数字が。
文化祭が終了して調度二週間後、新生徒会決めが始まる。亜美と甘音は来年が高校一年、つまり生徒会に入る権利が与えられるのだ。予定としては同学年の領可と類香も巻き込むらしい。新生徒会メンバーになるべく日々奮闘中である。

――さてと。今日も一日頑張るか。

きゅっ、と口元を結んで、力強く一歩一歩を踏み出して行く。
向かう先は生徒会室。最高の文化祭にするべく、誰よりも男前で誰よりも頼れる――兄貴と慕われる比成学園生徒会長はスカート丈よりも長い黒髪揺らしつつ階段を上って行った。

波乱の予感☆

「お帰りなさい」
「……は？」
文化祭まであと五日。当然の如くばたばたと忙しい学園、そして当然の如くあちこちに仕事よ仕事手伝ってと駆り出される毎日。あと少しで解放されるんだからも少し辛抱と耐えてはいるけれど、やはり疲れはするもので。仕事よ仕事のせいで学年が違うにも拘らず、帰りの時間がこの所皆一緒で帰ってきたのだけれど。
帰ってきて早々、波乱の予感……。
「か……母さん？！父さん？！」
「そうだけど。何？嫌だとでも言うのかしら」
「……ソンナコトイイマセン」
ここではい嫌ですとでも言えば波乱の予感は的中してしまう。話をずらさなきゃだな。
誰の母さん父さんかと言うと、全員の母さん父さんである。
つまり。
そこには世界旅行をしている筈の両親が集合していたのである。
「……あのさ、父さん」
「ん？どうした憂麻。そんな恐ろしい顔して」
「恐ろしい顔してじゃない。仕事投げ出して暢気に旅行とはどういった理由かよ」
「ははは。オレが仕事してないって？……冗談も休み休み言えよ」
名波家父改め愁麻（しゅうま）は綺麗な顔を綺麗に歪めていかにも不愉快そうな表情をした。
これぞ殺気オーラである。そんな愁麻になれない名波家以外の周りは、それでも流石と言えよう、表情をぴくりとも変えない。
「そりゃ、多少は観光旅行とかしたけど。世界のあらゆる人の集まる場所を巡ってきた」

「ほお。例えば？」
「本場ディズニーランドとか。もうほんと凄かった」
「ほとんど遊びじゃねぇか」
にこっと笑顔で見つめてくる我が父はあほなのだろうと思うが――
考えを改める事にした。
三代目は食い潰すという言葉があるけれど、その三代目にあたる愁麻は実際よくやっている。
先代よりも規模も二倍以上になり、あらゆるジャンルの娯楽施設を造りあげては全てを成功させてきた。
話術が異常に長けた名波家母改め夕巴（ゆうは）を右腕に、世界旅行を切り上げたらやり手な若社長とも同盟を結ぶつもりらしい。若社長の名は秋乃（あきの）。老若男女問わずその人柄の良さに人気のある人である。経営しているのがいわゆるメイドカフェやらホストクラブやらではある為、最初聞いた限りでは反感を買ってしまうようだが。
「まぁ……いいけど」
その若社長との共同作業として新たに娯楽施設を造る為に、というのならば。
仕方ないというものだ。それが仕事なのだから。
そして尚も胸の内にくすぶる不安は何かというと、正体の知れない波乱の予感のせいだと思う。

無敵の親達☆

まぁ、帰ってきたのは予想外だったけど、どうせ気まぐれなんだろうし。そのうちまた出てくだろう――と、思ったのだが。ぐあし、と母さんに見事至軟が捕まった。

「はっはあ、せっかく久々に親子団欒なんだしよ、逃げんじゃねえや」

けけけと恐ろしい笑い方をするのは投坂家母改め月妃である。

月妃は何もかもが相変わらずだった。その重圧のかけ方も、人を逆らわせないようにするやり口も。

「月ちゃん、あんま脅すなよ？」

「へっ、綾が甘いんだよ」

甘い？それは間違いだ。投坂家父、綾杜の得意分野は視線で重圧をかける事。かつて（今もだが）天下無敵と謳われた月妃でもその重圧に耐えられなかった位だ。至軟だけで無く、その場の誰もが（月妃除き。今は綾杜の重圧などどーって事無いらしい。末恐ろしい母親だ）耐えられるはずも無く。一気に背筋が寒くなった。

「それはともかくよ。お前、恋人できたんだってな」

ぶっ！！！！

「何を鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔してんだよ。麗奈ちゃんに聞いたんだ」

麗奈ちゃーーーーんっ？！

「ふふ、月妃は単刀直入ね。でも、コイビト、皆できたんでしょ？？」

清楚な身なりの砕楽家母だが、実際の所この笑顔の裏には相当な量の黒色が潜んでいると最近気付き始めた。眼鏡も伊達だと知った。

（どうでもいい）

……だがこの状況、かなり困る。恋人？できた。オレの恋人領だよ。とか言えねー……。

どうしよう？

周りに視線を送るが見事にそらされた。どうやら捕まったお前のせいだから何とかしろという意味らしい。酷い奴等である。

さあいぢめよう☆（前書き）

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４３７９ｎ／

関連作品です＾＾

良かったらどーぞ

さあいぢめよう☆

そんな中、至軟が唯一嬉しかった事は、領可の顔が真っ赤になっていた事。
「いるよ。恋人なら」
あまりにも可愛いからこのノリでいぢめちゃおうと決断した。
おいいいやめろおおおおおっ！！！！
無敵の親達の後ろで避難している領可は、必死な思いで（口パクで）そう伝えるけれどスイッチの入った至軟が簡単にやめる筈も無く。
「ほぉ。どんな子だ？」
にやにや笑いながら好奇心丸出しにしている月妃に、にやにやしながら遠まわしに領可をいじめる至軟。
その瞬間避難している誰もが『嗚呼やっぱ親子だ』と感じていた事は余談だ。
「んー、どんなかって言えば、見た目はすっごい綺麗で。……でも、中身は」
「中身は？」
「めちゃくちゃ可愛い。本人にはこんな事言えないけどな」
そんな事を少しはにかみながら言うもんだから領可はたまったもんじゃ無い。
オーバーヒートしてぶっ倒れた事は、言わずとも分かるだろう。

ｎｅｘｔ……

「しなんのばかやろー……」
未だに火照りっぱなしの身体を何とか冷やそうと、身に纏っている洋服を下着以外全て脱ぎ捨てる。
別に領可は可愛い、と言われただけでオーバーヒートした訳では無

い。
そう言った後の表情がいけなかった。
誰にも言っていないが、実は昔から至軟のはにかみにはとんと弱いのだ。普段余裕こいているようなタイプだから余計そうなのかもしれない。
それが自分に向けられたのは、何年ぶりだろうか。
いつからか、その表情を見なくなって少し悲しかった。
思ってみれば、至軟の事を友達として見れなくなっていたのはそんなに最近では無いのかもしれない。
ベットに横たわって、ふぅ、と息をつく。
シーツに顔を埋めると、至軟の香りがした。
（残り香……だよな）
ブルガリのオパフメエクストリームという香水らしい。五月の誕生日に麗奈から貰ったものだと言っていた。気になって麗奈に聞いてみると、
『あれね。確か九千円だったはずよ』
らしい。流石としか言いようの無い値段。
領可には到底届くはずも無い。
「はぁ……」
何故か、情けなくなってきた。自分は、至軟に対して何が出来るのか、と。
「領」
「わっ？！……至軟」
「何だよ、そんな顔して、ん？」
寝転がっている領可に覆いかぶさってくる至軟。グリーンティの爽やかな香りがふわりと鼻先をくすぐった。
「至軟の事……考えてた」
香りに気をとられて思わず素直に答えてしまう。はっと気付いた時にはもう遅く。
「何？誘ってる？」

「っ、違うって」
「本当？」
せっかく火照りから解放されかけていたのに、再び身体が熱を帯び始める。
「ほんと…だって、ば……」
困り果ててふいっと視線をそらす。
（やばい……心臓がっ）
明らかに心拍数が上昇しているのは至軟もよく分かっているはずだ。
それなのに。
「ならさ。何で服着てないの？」
「あ、いや、それはいろいろあって」
「いろいろ？どんな事？」
さらに顔を近づけられて、長い指であごを固定される。
視線が、それないように。
「どんなって……」
お前のせいだっつーの、とかはもちろん言えない。どうしてオレのせいなんだ？いや、それは。そうか、吐かせる楽しみができたなとかなるだけだ、絶対。
「大丈夫だぞ。感じちゃったとかそんなんでも、オレは別に気にしない」
「ぶっっ！！！！」
この変態め。せっそうなしめ。
「もしそうなら手伝うし」
「……何を？」
「気持ちくなるのを」
……聞かなきゃよかった。
もう恥ずかしくて、仕方が無い。
少し前にさらに恥ずかしい思いはしているのだが、あの時は電気を消してくれた。でも今は違う。
視線もそらせない。じっと、見られたまま。

「っ、領？」
何故か至軟が困ったような顔をする。何故だ、と思ったけれどその謎は直ぐに解けた。
瞳に涙が、あふれていたのだ。
「ぁ、ごめん。……だって、あんま見られたら、恥ずかしいだろっ……」
とりあえず、開き直る事にしたのだが。
人には視線をそらせないようにしたくせに、先にそらしたのは至軟だった。
ちょっとむっとして覗き込むと、こちらも困った顔をしていて。
「これだから……可愛いんだ」
至軟の小さな呟きを領可が知る事は無かった。

番外編　類香×麻矢　ポッキーゲーム☆（前書き）

今回は番外編です。
攻め受け逆転劇！！

番外編　類香×麻矢　ポッキーゲーム☆

ある日の昼下がり。
冬なんだか春なんだかよく分からない今日この頃。
春なのにさみぃよ、と内心突っ込み入れまくりの毎日。当然のごとく桜は咲かず、目もさみぃよと訴えているようだ。
そんな中、ばっちり春が来ている場所があった。
類香の脳内である。
桜の花びらがひらひらと舞い、普段緩すぎると言われる表情はというと、ゆるゆるのとろとろ。だが彼の表情が、ゆるゆるのとろとろになってしまうのも仕方無いと言える理由があるのだ。
麻矢のお見合い話が無くなった。
本人は最初から否定していたが、両親が会ってみなさいと珍しく利かず、激しく困っていたのだが。しかも相手の令嬢が麻矢に気があるというのだから、タチが悪い事この上無い。
権力も地位もあり、見目も恵まれている美優　真樹という令嬢。名波財閥は政略結婚しなければいけない程落ちぶれていない。
だから何故今更のようにお見合いなど持ちかけてきたのか、不思議でならない訳だが。
どうしよう嫌だ嫌だと混乱しているうちに、知らぬ間に、事は解決していた。
いつの間にとか、真樹令嬢は大丈夫なのかとか、聞きたい事は山ほどあるのだが、それは麻矢にとっては不快な疑問なのだろうと判断して、一段落して良かったねとしか言っていない。
何はともあれ解決したものは解決したのだ。
大好きな恋人のお見合い話が無くなった。表情がゆるゆるのとろとろになってしまった理由がこれである。
くるくる回る椅子でくるくる回りながら麻矢の帰宅をひたすら待つ。

うん、これもなかなかに良いかなぁ。

思わずくすりつ笑みをこぼし、机に突っ伏す。
麻矢はさっき、何故か急にお菓子が食べたくなったと言って、何故か至軟と憂麻と共にコンビニへ何故かとろけそうな笑顔で向かった。
疑問は多くあれどまぁそれはそれ。
そしてうとうと眠くなっていたその時……。
「ただいま」
コンビニの袋を腕に下げてめったに笑わない麻矢がそれはそれは楽しそうに笑い、というかにやけながた帰ってきた。
「お帰りなさい。ね……何か楽しい事あったの？」
「……いや、これからある」
これから？
でも麻矢がこんな楽しそうだし、きっと凄く楽しい事なんだろうなぁ。
……何か無性に気になってきた。
「これから？何があるの？」
興味津々で身を乗り出す類香の朱色の頬に掌をあてやる。
「知りたい？」
「知りたい！」
当たり前だよ。すっごい気になる。
きらんきらんと瞳を輝かせながら麻矢を直視していると、仕方無い……と少し嬉しそうに呟く。
「……はいよ」
「へ？」
赤くなりながら手渡してくれたのは。
「チョコ」
「ちょこれぇと？」
「……ん、バレンタインのお礼してなかっただろ」
いや、確かにそうなんだけど。

かさかさと音を立てて包みを開くと……、何故ポッキー？
「いや……さ。本当は至軟に世話になろうと思ったんだけど。毎年そうだけど……。まぁ形式をたまには変えようかと」
今日、一応記念日だし。
……二回目の。
頬を火照らせながらそっぽを向く麻矢。
「記念日……覚えててくれたんだ」
「当たり前だろ。誰が忘れるか、こんな大切な日」
麻矢が頬を赤らめながら微笑む事は本当に稀。
レアな表情見ちゃった。
記念日とバレンタインのお礼がコラボするとこんなイベント起きるんだ。
うん、覚えとこ。
ちょっと嬉しくなる類香である。
「それで……形式変えるって？」
「ポッキーゲーム」
「……あい？」
「あいつらと話してたらいつの間にかそういう事になってた」
あいつらとは至軟と憂麻の事。
成る程確かにあの二人といると予測不可能な事態に陥る……いつもの事だ。
「ただ……今回はオレも結構ノリ気だったりする……」
「ま、麻矢が？」
これは珍しい。こういう事にとんと無頓着というか、あの二人をあまり相手にしようとしない麻矢が関心を示した。
いつもいつも何故かトラブルを持ち込む彼等の話をまともに聞くとは……。
そして当の本人はというとそわそわとしている。
何だか、らしくない。
そわそわしながら頬を火照らせながらもじもじしながらちらちらこ

ちらを見ながら瞳をうるうるさせている麻矢なんて見たことが無い。
早い話、
今の麻矢はとてつもなく
可愛かった。
「……ん。何かどっかのアイドルグループのサイトにポッキーを折らずに食べきれば、二人は幸せになれるとか……運命の人……、とかいろいろ書いてあったらしくてな。今大流行中らしい」
名波財閥ではポッキーゲーム用の商品開発まで始まって……有名人の影響力って凄いもんだな。
ぽそっとそう呟くけれど、麻矢の影響力だってかなりとんでもない。
バイトがてら、とモデルの仕事を何度か引き受けた事があるのだが、麻矢の着た衣服から小物まで、雑誌の出た一日後には全て完売するというトンデモな現象が毎回毎回起きる。
おかげで本人の知らない間にファンサイトまで出来てときにはパパラッチにまで追われる始末。
ね、かなりとんでもないでしょ？
それにしても。
恥ずかしくなると髪をかきあげる癖、変わってないなぁ。
「いーよ、オレも知りたい。……本当に、オレなんかで良いのか……」
もしも途中で折れてしまったら。
もしも……そうなってしまったら。
凄く嫌だ。嫌だけど、確かめずにはいられない。受け取ったポッキーを口に銜えてスタンバイ。
運命の瞬間に、いざ出陣。

ポッキーを口に銜えた類香の上目遣いは、もの凄い破壊力だった。
恥ずかしそうに眉をきゅっとひそめて、首をかしげる。いーよ、と

いう合図らしい。
端を口に銜えて、麻矢も絨毯に座り込む。
こういう時はお互い目をつぶるものなのかもしれない。
けれどつぶろうとは思えなかった。類香もそうらしい。
折れませんように、折れませんように。
切実にそう願っているのは自分だけでないと思うと少し安心した。
ぽきっ、とどちらからとも音がする。
一口、二口、三口、そして、四口目。辿り着いたのは……
類香の唇だった。
とたんに頬が熱くなる。恥ずかしくて、もどかしくて、そして嬉しい。
口の中のお菓子を食べ終わると、思わずはにかんでしまった。
――柄にも無く……今日のオレは明らかにおかしいな。
おかしいけれど、まぁいっかと思ってしまう。
類香を見てると、不思議な事にどうでも良くなってきてしまうのだ。
「良かったぁ……。何かオレ、変。こういうの、そこまで信じるタイプじゃないんだけど……やっぱり、麻矢だからなのかも」
「そんな……事、言うな」
「……？」
「だって、さ……嬉しい、だろ」

……？！
麻矢が素直になった！！！！
どうしよう、可愛い……。
どうしよう、欲情しちゃう。
抑えなきゃ、自重しないと、そう思っても。
不可能だった。今のオレにはそんな事出来ない。
「っつ？！」
あからさまに驚いているのが分かる。分かるけれど、やめるつもりは無かった。

麻矢を押し倒して、唇を重ねる。
それだけでは飽き足らず、わずかに開いた間へと舌を無理矢理突っ込んだ。
ただ、ぐちゃぐちゃにしたかった。
愛しくて仕方無い恋人を。
やられるがままの麻矢なんて、珍しい。
今日の麻矢は、いつもと違う。何もかもが違うけれど、それでも類香の大好きな麻矢だった。
口腔を舌でまさぐる。唾液が絡み合って、口の端からこぼれても、そんな事は気にしていられない。
それ所か余計欲情してしまって。結局事態は収拾がつかなくなり。
「ぁ、っん……」
喘ぎ声にさらに興奮して。
もっともっと、いじめてあげたい。
もっともっと、恥ずかしくしてあげたい。
自制心なんて、とっくにどっか行った。いつもの自分も旅に出て行方不明。
なら、もう少し、こうしてても良いよね？

番外編　類香×麻矢　ポッキーゲーム☆（後書き）

これ以上行くととんでも無い事になりそうなので、
ここらで…

学園の二人の美女☆

「あら、この子は新顔さんね」
毎日恒例の下駄箱イベント新顔さんを見つけて麗奈はくすりと笑う。
成績優秀、眉目秀麗、文武両道、寛仁大度、とにかく言葉を尽くしても尽くしても名波　麗奈という人物を表す事は出来ない。そんな現実離れした麗奈に周囲の人々はどんどん魅了されていく。
彼女の欠点は、欠点が無い事とまで言われている程。
「麗奈の下駄箱はいつも華やかというか、騒がしいと言うか……」
肩をすくめて、ふっと兄貴こと会長花凛は笑う。
「それは花凛も同じでしょ？」
「まぁな」
だが彼女達への手紙とプレゼントの山の贈り主には、素晴らしい程の違いがあった。
まず麗奈。
彼女宛の物は男女どちらかというと男子からの方が多い。
スタイル良し、顔良し、つまりプロポーションがとれている所は二人共共通しているのだが。
見た感じの華やかさは、明らかに麗奈の方が上。見た感じの華やかさとは、歳相応の見た目という事。
その他もろもろ含め、彼女は男子の評判が高い。
いっぽうの花凛はというと、どちらかと言うと女子にファンが多い。
確かに華やかなのだが、見た目あまり歳相応とは言えない。
早い話、大人っぽすぎるのだ。そして会長としての仕事ぶり。
なにもかもを完璧に、かつ要領良く全てこなしてしまう彼女の事は名波財閥でもとても有名。
というのは、麗奈の店の切り盛りを裏でこっそり手伝っている事を皆知っているからだ。
麗奈は猪突猛進な所がある為、いつもこっそりと知らぬ間に事を済

ませてしまう花凛いてこそだったりする。（名波財閥云々は流石に皆は知らない）
そして口調の勇ましさも手伝って、兄貴、兄様なんて呼ばれ、兄様ぁ、一生付いていきますーなんて本気で言い出す女の子も続出。
ついでにレズも続出。
裏ではこの学園の男子生徒のちょっとした憎き対象だったりもする。
「さてと、文化祭、ついに明日始まるのね……」
「あぁ、そうだな。絶対、成功させよう」
「うん、絶対。花凛の最後の大仕事だもんね？」
その言葉にはっとする。
「何だ、そう思ってるの、気付かれていたんだな……」
「あったりまえじゃな～い。私達、何年の付き合いよ。あなたの考えている事なんて、お見通し」
びっとをこっちを指差してにこっと笑う麗奈。
ありがとう、いつもいつも私の心の奥深くまで、きちんと把握してくれて。
本来はそう言うべきなのだろうが、素直になれない花凛は
「人に向かって指差しちゃいけませんて、ママに教わらなかったのか」
思わず説教臭い事を言ってしまう。
けれどそれすらもお見通しの麗奈はただただくすくすと笑うだけであった。

文化祭まで、あと数十時間……。

何が何でも、絶対成功させてやる……！

二人の胸の内は同じだった。

学園の二人の美女☆（後書き）

季節外れの文化祭になってしまったけれど、お気になさらず　汗

告白話☆

「文化祭…明日だな」
「うん。あー今年も選ばれるとは……しかもオレらは女装だぞ、女装！！メイド服っておま」
突っ込み所満載過ぎるわ。
そう呟く領可は本当に嫌そうな顔をしているが、オレにとっては願ったり叶ったりだ。
「まぁ、でも女装自体はもう撮影でしちまったし。諦めろ」
「……オレのプライド」
はぁっ――――と盛大なため息をついてベットに腰掛ける。その隣に腰を下ろして顔をのぞき込むと、ドアップの領可と視線がばっちり合ってしまった。
当然といえば当然なのだが。
そして――ぎゅっと抱きしめられる。
「ん？領、どうしたんだ……？」
「……あ、何か、無性にこうしたくなった」
そっかそっか、よしよし。
頭を撫でながら、腰を抱き寄せる。
領可がぎゅっと抱きついてくるのは、たいてい『不安』『不満』『悩み』『ストレス』がたまっている時。
今がまさにそうなのだろう。少しでも気を紛らわせてあげたい……
いつしかそう思うようになっていて、そして、今も思っている。
だからこそ、無言で抱きしめ続けた。
「いつもいつも……ホント、ごめん」
「謝るな。オレがしたいから、こうしてる。お前のせいじゃねーし、オレも嬉しいから……こうやって、頼ってくれるの」
だから謝るな、分かったか？
耳元で、そっと呟く。

吐息に触れて少しびくつきつつ、小さくこくりとうなずいた。
「至軟は……えっと、どうして、オレの事好きになったの？」
「ぶっ！！！！」
あまりにも直接的過ぎる問に思わずふきだしてしまう。
お前、それはパンチ効きすぎるから。
「ねぇ、何で？いつから？？」
「ったく、急に何だよ。参ったな……。……そう、だな。
いつって言われると、正直分からない。いつの間にか、お前の事しか考えられなくなってた。……領が嬉しそうに笑う度にどきどきして……嬉しかった」
独り言のように呟き始める至軟を見ていて、内心ああ聞かなきゃ良かった、と実は後悔していたりする。
こっちこそ嬉しくて、何だか身体がふわふわしているような気分になって。
「女の子といるの見ると、苛々した。オレ以外の奴に笑いかけてるの見るだけで、ずきずきしたし、悲しかった。……でも今はそんな事無い。領が好きって言ってくれたから、安心したのかもしれない」
そして1拍置いてから、領、こっち向いて。
領可の顎を長い指で持ち上げて、言った。

「オレの事、好きになってくれて、ありがとう」

最高の笑顔で――――――。

当日！！とんでも無い事実☆

「ちょっとっ、演劇の衣装裾がほつれてるじゃないの！」

「理事長ってば、何処にいるんだ……」

「あーいやだ、ジュースこぼした！！何か拭くものある？！」

流石文化祭当日、比成学園はまだ朝7時だというのに人の多さと忙しさが尋常では無かった。
学園中を人が右往左往する。その人の多さは朝の出勤時間さながらであった。

そしてそんな中人口密度は低いものの、とんでもない熱気で溢れている部屋があった。
１５０畳はあるであろうその広い部屋にいるのは　執事服を着た憂麻、至軟、麻矢、中等部一年の啓杜（けいと）、高等部三年の世都（せつ）。
メイド服を着せられた哀れな犠牲者　琉峡、領可、類香、高等部二年の羅衣（らい）、中等部一年の伊致斗（いちと）。
そして男装をした花凛、亜美、以下省略。メイド服を着た麗奈、甘音以下省略。
既に疲れ気味な男性陣。
気合入れまくりの女性陣。

……何なんだ、この温度差は。

「さぁさぁ、今日は絶対に成功させるわよ！！たとえ、今指名手配中の殺人鬼から脅されようとっ」

……は？

今この人さらっととんでも無い事言わなかった？
ぐっと拳を握り締める麗奈をまじまじと見やる。
目はきらきらと光を放っていたけれど、とたんにさっと顔色がおかしくなる。
「ば、ちょ、麗奈！！」
「あ……あは、えへ☆」

「……えへ☆じゃないだろっ、姉貴、おま、それ本当なのか？！」
「あは、うへへ、いやぁ……てへ☆」
どうやら、事実らしい。
今日から五日間に渡って行われる文化祭は、とんでも無い事になりそうだ……。

最後の大仕事☆

麻矢がはぁあ、と頭を抱えて盛大に溜め息をついている後ろで――
「え、麗奈ちゃんそれって……やっぱガチ？」
至軟は珍しく真面目腐った顔で麗奈を問い直し。
「え、うおぉまじか！？今朝のニュースとかでもやってた、あの新聞の三面の記事とかに載ってそうな事やらかした人かっ！！」
こういう関係はとことん楽しむ傾向にある領可は相変わらずで。
類香は、壁にもたれてすっかり呆れ返った顔でいる麻矢の気を何とか留め様と
「だ、大丈夫だよっ、よくある事だって」
……かなり混乱している。
こんな事がよくあったら日本の未来は絶望的だ。
憂麻は麗奈の肩をがたがた揺らしながら目をつり上げてそういう事は早く言えを連呼し、琉峡は白くなって固まっていた。
「あはは参っちゃうわねぇ、ばれちゃったわぁ～」
「参っちゃうわねぇ、じゃねぇよっ！！」
亜美と甘音は何やらひそひそと話し込んでいるし。
二人の会話を聞いていると、どうやら今回の件については知っていたようで。
それでもこの二人は呑気なものだった。
「でもさ、あの殺人犯、なかなかに美形だよね」
「あっは、分かる分かる。まつげとか長くてさ。ホント殺人なんて勿体ない事したよね～」
「うんうん。何かアレだよ。綺麗な狂人って事でいろんな人が魅了されちゃって、ファンサイトできちゃったって」
「うぅえっへ、知ってるソレ。でもサイトが立ち上がる度に消されて、また立ち上がってって感じだから、なかなか辿り着けないとかなんとか」

どうやら情報通なのはこの学園内に限らないらしい。おっかない奴等だ。
そしてよくもそんなに冷静でいられるものだ。
相手はいくら綺麗でも冷酷な殺人犯。そいつから脅されてるってのに……。
まぁ、かなりの美形ではあったけどさ。
でも領の方が百倍綺麗で可愛くて可愛くてさらに可愛いぞ。
少し興奮気味になっている領可の顔をちらりと見やると視線が合って、ふわり、といつもの笑顔を向けてくれた。それが無性に嬉しくて――。
思わず耐えられなくなった至軟は領可の腕を引っ張って、思わず広い部屋の隅――皆の視界の届かない所――に連れ出していた。

「――と、いう事なのよ」
はぁ…とため息を零しながら、姉貴はこうなってしまった経緯を一通り話してくれた。
比等学園の衣装担当の二人も合流し、ゲーセンのプリ機を片っ端から制覇していたその時、事は起きた。一人のとにかく綺麗な――特に長髪の黒髪のツヤがはんぱ無い――二十代前半辺りの男性が近寄ってきて
『貴方達の学園は――毎年素敵な文化祭をしていますが。私がさらに素敵なものにして差し上げよう。二日目の正午……ぜひ胸躍らせて待っていて下さいね』
そう言って、麗奈に脅迫状――本人曰く、脅迫状では無く狂迫状――を持たせられたらしい。
「そっれが、ホントーーーーーにっ、綺麗な方だったのよ！！！！！それで魅了されちゃってどうしようも無くてねっっ！！！！！！」

こんな事を言うのもアレだけれど、姉貴の周りにいる男女共々綺麗なのばかりで、そういうのには並ならぬ免疫があるはずだ。それは姉貴だけじゃ無くて、会長にも亜美にも甘音にも言える事。（比等の二人も常識外れに可愛いらしい。て事はこの二人にも多少なりとも免疫があるはずだ）

そんな人外なメンバーがそろっていたにも関わらず、誰一人としてその殺人鬼に反応出来なかった。

て、事は。

オレ達誰もが会った事が無い程の美貌の持ち主だという事だ。

第一派手にやらかしてるくせに未だに捕まらないのは、その並ならぬ美貌のせいらしいし。

「でも、次は大丈夫よ。免疫出来たもの」

どうだか。

相手は見た目も中身も人外なのだ。今後どうなってくるかなんて分かったものじゃない。

「あら嫌だ。憂麻あなたおねいちゃまを疑うのかしら」

「……」

ケンカなんだか争いなんだか判らない会話をする隣で優雅に花凛が脚を組み――麻矢と比でない程大きなため息をついて小さく呟いた。

「だが……非があるのは麗奈だけでは無い。私にだって非はある。……もっと、しっかりしないといけないな」

髪をふわっとかきあげて、もう一度ため息をつく。

顔を覗きこむと本当に複雑そうな表情。

やっぱ、会長にとっての最後の文化祭であり、最後の大仕事だ。

成功させようと今まで努力を惜しまずしてきたのは学園中の誰もが知る事実。

そんな文化祭に今話題になっている殺人鬼からの脅迫状。皆会長の為に成功させよう、と口を揃えて言う、よりによって今年のこのイベントに。この事実に一番ショックを受けているのは間違いなく花凛だろう。

「だけどっ、情けない事に……私はどうしたら良いか分からないんだ！！」
歯をぐぐっとかみ締めて。頭を抱え込みながら、泣きそうな表情で、
それでも泣かずに。
そして顔を力強く持ち上げて
「皆、この文化祭の成功の為に……力を貸して欲しい」
そう、言ったのだ。

お決まりの☆

「何よ今更。……当たり前じゃないの」
力強くそう言う花凛に、私は即答していた。
私達にとって、『比成学園の生徒として』の文化祭は今年で最後。
最後であり、一番最高の思い出にしたいこのイベント。
あの殺人鬼――ウィルは、確かに超絶綺麗で、人外魔境的美貌の持ち主で。
見ている分には、とても目の保養になるんだけど……天然記念者、絶滅危惧種だけど、それでも。
私達の頑張り、そして大事な思い出にしたいこの日をめちゃくちゃにする奴は、誰であろうと許さない。そんな事をする悪い子ちゃんは、ばっちり成敗してやるわっ！！！！
「そうだな……皆にも協力してもらった方が、絶対に成功率は上がるだろうし」
成敗してやるとその場のメンバーで意気込んでいたその時、後ろから聞きなれたテノール声。
「あ、理事長！！」
その声の持ち主は、比成学園の理事長こと牙王（がおう）　比成（ひなり）だった。

「その様子からいくと……理事長もこの事知ってたんですね」
腰辺りまであるウェーブのかかったなめらかな茶髪を揺らしながら、比成の元へと歩いていく麻矢。その瞳は、若干呆れたような色をはらんでいた。
「あぁ、知ってた」
比成もそれが分かったはずなのに、相変わらず笑顔を崩さない。

こんな事態なのに……つくづく分からない人である。
「では……警備の強化はしているんですか？」
警備の強化。
この状況で唯一出来るのはそれ位。ならば当然している筈だ。
「強化、ね。もちろんしてる。でも……今回のケースからいくと正直意味が無い気がするんだ」
「意味が無い？」
「そう。いくら最先端の技術と今出来る最高の警備でいたとしても、奴――ウィルには通じないって、オレは思ってる」
そう呟く理事長は本当に真剣で、いつもの飄々としたイメージは欠片も無くて。
オレの知ってる理事長じゃない様な錯覚に陥った。

この人は、誰なんだろう。

「理事長、それ、前も言ってた。どうしてそう思うのかしら？……根拠を教えて欲しいんだけれど？」
「そうだな……麗奈、ウィルについて調べた事あるか？」
「えぇ、一応は。彼のファンサイトにたまたま一昨日辿り着けて、そこから彼についていろいろ辿ってみたの。超絶綺麗な殺人鬼ウィルは、正義の味方と言われていて。彼が殺すのは、決まって最低な手口で殺人をした人物で、その人物が行った方法で殺人を行う。彼は正義。見返りなんて求めない――彼のファンは皆、このようなコメントを残していたわ」
『彼は正義。見返りなんて求めない。』
彼のファンはそう語っているみたいだけど、本当にそうなのか。
そう思わずにはいられなかった。
見返りを求めないで、こんな人外な事出来る筈が無い。常識外れで、人間の中の“普通”を見事に覆した。

「そう。ウィルは正義、それに彼の殺しは芸術とまで言われている。麗奈、それだけじゃ無いだろう？」
「……変装の達人、そうも書いてあったわ。類稀なる美貌と完璧な変装。それが今彼を捕まえる事が出来ない理由。私はそう思っているけれど」
顎に指を添えて、考える人のようなポーズをとる姉貴。姉貴も理事長同じくいつものへらへらした感じは微塵も無かった。それが、この事態がどれ程に深刻なのか物語っているようだ。
そして難しい顔をしているであろう比成の方をもう一度見やると――
……は？
麻矢の脳内に浮かんできたのは８個の三点字リーダーの後に『は？』だけであった。
と言うか、この状況でこんな表情をしているこいつを見てそれ以外に浮かぶ事があるなら是が非にも教えて貰いたいものだ。
この状況で、こいつ――もとい、理事長はいつもの飄々とした……早い話し、口元をゆるめたへらへら笑いを浮かべていた。
「そうだな……もしも全てが本当なら、そうなるよな」
そしてこの言葉。先程の真剣さは何処へやら。
理事長がいくら飄々としていて常識外れな所があろうと、これは流石に無いだろ。
この人は、確実に何か知ってる。
結論は急ぐもんじゃない。分かってる。
分かってるけど、多分これは確実だ。
この言葉に疑問やら何やらを感じたのは、当然麻矢だけで無いようで、皆一斉に理事長の方を向く。
口元の端をくっと上げて
「世の中、見える事だけが全てじゃ無い、って事は皆よく分かっているだろう？ウィルが芸術的だと言われる殺人を繰り返す事には、実は意味があるんだ」
またもや意味の分からない事を言い出す。さらに首をひねるメイド

カフェとホストクラブメンバー。
「はは、分からない事だらけだろうな。まぁ、本人に全てを話してもらおうじゃないか、なぁ？」
にやにや笑いを浮かべて何やら後ろの方に話しかけている。
頭にハテナマークを沢山付けながらそちらを振り向くと、そこには……。

こんなお決まりな展開があって良いものか。
世の中の仕組みは一体どうなっているんだ。
これは一体全体どういう事なんだ。
目の錯覚なのか。

さまざまな疑問が頭をかすめるけれど、一瞬後にはそれらの疑問が頭に浮かんだ事すら忘れているような、そんな状況。そこには

「ウィル……？！」
ウィルに最も近い位置にいる世都が驚いた声をあげた。
ウィルが、冷酷で残酷で壮絶綺麗で芸術的な彼がそこには居たのである。

もう一つの物語☆

当然その後はパニック。
どうしてこの人がいるのか……

では無く。

「どうしてこんなに綺麗なのよ！！！！」
ではあったが。
パニック状態に陥ったのは事実だ。
確かに綺麗だ。綺麗ではあるけど、オレはりぃ以外に振り向く事は絶対に無い。りぃも……『実はずっと好きだったんだよ。……何処ですれ違っちゃったのかな』なんて可愛い事言ってくれた。至軟は領にめろめろ領もめろめろのバカップルだし、そういう関係という意味では一番の古株の麻矢と類香がお互い以外にときめくはずが無い。
至軟と領辺りなんか
『お前の方がオレは好きだし、お前の方が絶対綺麗だし可愛いから』
『か、可愛いとか言われても嬉しくねーよ』とか良い始めそうだなとか思いながら二人を捜すけれど……
あれ？いない？何処に……あちゃー……。
既に物陰でいちゃこら最中であった。バカップルぶりをいつも以上に惜しみなく発揮しまくる二人はいろいろおっかない事になっているのでこの際無視。
くそー羨ましい。オレだってこんな可愛い格好した琉峡に手を出さないでいるので必死なのに。
近くにいても凄然とした態度を取れる麻矢がオレには分からない…

……。
どうしてもガーターベルトの辺りに目線が行ってしまう自分が恨めしい。
出来ればずっとガン見してたいけど、それは流石にな。周りにばれない様にしないといけないし。
「うんうん、パニくるよな、何でだって。でもそれは今はやめてくれないか？ウィルの話しを、お前等にはじっくり聞いてもらいたい」
そして再び真剣な眼差しになる理事長。
ウィルの話しをじっくり聞いてもらいたい。理事長がそう言うからには何かあるのだろう。
静かで、それでいてよく通る声と共に、静まり返る教室。
とたんに真面目さが移る皆の瞳。
「では――――私の話しを、是非とも最後まで飽きずに聞いて頂きたい」
初めてウィルが口を開いたその瞬間――――

鈍い音が、何度も聞こえた。
そして、何故か体が急に重くなる。
あまりにも突然な出来事ですぐには対応出来なかったけれど、重い体をぐっと動かして後ろを振り向くと
「……何でこうなる」
麻矢の冷静な突っ込みが入った。それも無理は無い。
オレとりぃ、至軟と領（この二人はある意味例外）、そして麻矢と類香、姉貴と会長、亜実と甘音、理事長とウィル以外はぶっ倒れていたからだ。
「あぁ…まぁ無理無いわな」
理事長の話しによると、ウィルの声に免疫が無い人は大抵ぶっ倒れるらしい。
稀にぶっ倒れない人がいるけれどそれでも体がだるくなるとか。
「あー、だから急にだるくなったんだな」

肩をまわしながら至軟が領可を姫抱きしながらぼそりと呟いた。
「お前は何をいちゃこらしてんだよ」
「どうだ羨ましいだろ」
「お前は何をするんださっさと下ろせ！！」
「羨ましくない」
「そーかそうか羨ましいか」
「羨ましくねぇ」
「だから早くおろ」
「素直に羨ましいって言えよ」
「言わない。羨ましく無いし」
「何だよ素直じゃ」
「聞けーーーー！！！！下ろせってんだよ」
ったく、いちゃこらいちゃこらしあがって。あぁあぁ羨ましいよ。
オレだってりぃをぎゅってしたいよ。
だけどいくら既に感づかれてるからってさ、もうちょい控えようぜ？
「何故なのでしょうね……今まで私の声を聞いて何も症状が出なかったのは比成と侯爵だけでした……。そんなに、不快な気分をさせてしまっているのでしょうか」
いや逆だろう逆。綺麗過ぎてぶっ倒れるんだって。
しかもぶっ倒れる理由は声だけじゃ無くて、その容姿も関係あると思うんだけど。
てゆうか、侯爵？
「ウィル……それは違う。まずウィルの見目で負担がかかって声で追い打ちかけてんだって。なぁ、ゲーセンの時、周りに被害出なかったか？」
「あー……多少は。顔が見えないように深く帽子を被っていたが、ばたばたと。そうか、だからあの時急にだるくなって人がばたばた倒れたんだな」
会長は成る程と何度もうなずく。
「あの、そろそろ話しを戻しても？」

「あら、ごめんなさい。では……是非とも」
彼と全員が向き合い話しを聞く態勢に入る。
そしてウィルの訳ありそうな、何とも言えぬその透明な声が綴っていったもう一つの裏の物語は、予想もしない、夢にすら思わぬ、信じられないものだった。

去年の秋……11月25日……私の妹のルルィ・アシルファは誘拐されました。彼女は、私の唯一血の繋がった家族です。幼少時代、彼女と私はストリートチルドレンとして育ったのですが……とある日私達は拾われました。その拾い主が、イギリス貴族のルイックトン侯爵。侯爵が言うには、私達の髪の色があまりにも綺麗な黒だったから、気になったとの事……それと、侯爵はルルィに一目惚れしてしまった様で。当時15歳だったルルィと17歳だった私は拾われた後、大切に育てられました。そして当然の如くルルィは彼の姫君となりました。そんな幸せな日々を送っていたのですが……悲劇は突然起きました。
ルルィが、さらわれたのです。
私が言うのもなんですが、彼女はとても美しい子……私のような出来損ないの兄を持ってしまって、きっと悲しんでいる事と思います。そう思うと不憫で不憫で……え？私も十分美しいと？ありがとうございます、たとえお世辞でも嬉しいかぎりです！皆さんはそう言ってくださる、けれど私はどうしてもそうは思えないのです。はぁ、どうしたら……
と、あぁすみません、話しを戻しますね。
彼女の美しさに魅了されてしまう人は大勢います。そんな人々に、誘拐されました。
どうやら彼等は彼女を……性欲解消に使おうとしているようです。

そうして彼女を一生監禁し、時には金儲けに使い……というのが目的らしいのですが、まだ手出しはされていないようです。
そして彼等は言いました。
ルルィに一生拭えぬ傷を付けたくなければ、兄であるお前が彼女の身代わりになれ、と。
そうして……私は殺人鬼となりました。そうなるよう、指示されたのです。
ですが本当に殺しをやっては、彼女が無事に復帰しても世間の目は冷たいまま。
だから、私は“殺したフリ”をする事にしたのです。
「え、ちょっと待ってくれ。フリって……それはどういう事だ？」
「えっと、あなたは……」
「花凛です」
「花凛さん……そして皆さんも疑問を抱いた事でしょう。殺人鬼が殺しをしていないなどと言い始めては混乱するしかありませんものね」
実はイギリス警察に頼んで、被害者を保護してもらっているんです。殺したフリをして、保護をしてもらう。そして、ターゲットは残酷な殺しを行った者に絞りました。
もちろん、ターゲットを絞った所で世間の目は冷たいままですし……彼等を捕まえる事が出来たらニュースで“殺したフリ”であったと大々的に取り上げてもらえる事になったので、意味は無いのですが……これは、いわば私のプライドです。
え？どうしてイギリスで無く日本でこんな事をするかって？
あぁ、それは……どうやら日本の警察は優秀だから、お前の変装技術がいくら優れていようがきっとすぐ捕まるだろうという、くだらない理由のもとだそうです。ちょっと反応に困る返答ですよね。
彼等は本当に上手なかくれんぼをしています。まるで彼女以外誰もいないかのように……。
「これが全貌です。……あぁ、やはりびっくりしてしまいますよね

……。そこで、旧友である比成に応援を頼もうと、この学園に仕掛けたフリをしたのです。驚かせてしまってすみませんでした。皆さんの大事な文化祭を壊すつもりはありませんので、ご安心を」
この不運過ぎる話しの後、あぁそうですか仕方が無いですね以外に何と言えよう。
「まぁそういう訳だから、お前等協力してくれ。皆きっれーだから役に立ってくれるだろう」
にやりと笑う理事長は間違いなく旧友の為では無く自分の娯楽の為にそう言っている。
それはよく分かるのだが……。
「分かりました」
ここにいる誰もが、同じ答えを即答していた。
「うふふ、血肉踊るお祭りの予感がするわぁ」
娯楽の為に動くつもりでいるのが他にも役1名。こんな状況でよくそういう事言えるもんだと麗奈の方を向いてため息をついた。

あなたの為に☆（前書き）

今回も先生ズの話。
前回引き続き演料と瑞南。

あなたの為に☆

「はぁ……参ったな」
「……参りましたね」
ウィルの件については理事長の比成に聞いた。
旧友だと言う事、ウィルは殺人などしていない事、釈明に協力を求められた事、例のメンバーも協力する事になった事……。
「あまりにも事が唐突過ぎて……正直、頭が付いていきません」
「心配するな。オレも同じくだから」
「……ですよね」
にしても。
理事長が生徒を巻き込むなんて……珍しい。
あの人はおっちゃらけてはいるけれど、生徒を危険な目に合わせる様な事をする人では無いはずだ。なのに、何故……。
「理事長は何故生徒を巻き込んだのでしょう」
「そうなんだ。オレも気になって本人に聞いてみた所……犯人達は未成年をよくターゲットにするそうだ。だから綺麗で目立つ未成年達に協力を仰いだ訳だな」
なんだそれは。
「真の変態ですね」
「まぁそうだな。あ、でも変態ならお前の付近にいくらでもいるぞ」
「……？」
「でも仕方ないと言えば仕方ない」
「！？」
演料は何が言いたいんだろう？
「ほら、お前可愛いから」
艶っぽい声でくすりと笑いながらそう言われるけれど一瞬理解出来ず……そして
「か、かか……ええ演料はまたからかうんですか！！」

「からかってない」
演料……お願いですから……そんな、悲しそうな顔をしないで下さい。
今まで見たことも無い様な切なげな表情に胸が痛む。
「……演料にそういう事を言われるとどうしたら良いか、分からなくなるんです……。だ、から……えっと――」
「もういい」
無理させてごめんな。
苦笑しながら髪をくしゃりとされる。そしてそのままぎゅっと抱きしめられてしまった。

どうしよう……心臓が痛い……。
演料はオレの事なんてどうも思ってない。だけどオレは演料が愛しい。でも、演料には迷惑をかけたくないし、かけるつもりも無い。
だから、我慢しないと。

そう思ってるのに。
そう思っても。

やっぱり胸は苦しいままで、どうしても見つめたくなった。
ふと見上げると視線ががっちり合った。その瞳は優しいけれど儚げな、悲しい色をしていて。
「演料……何かあったんですか？」
気づいた時には口が開いていた。聞かずにはいられなくて、悲しい瞳の意味を知りたい気持ちが押さえられなかった。
「……あぁ、今日さ……オレの大好きな人が他の男にスキンシップされてて、思わず妬いちゃったんだよ。心が狭いだろ？」
大好きな人。
演料の大好きな人。
…オレの大好きな人の大好きな人……。

ずきっ。

痛い。あちこち痛い。

我慢しないといけないのに、我慢したくない位痛い。

スキンシップされるだけで妬いちゃう位大好きな人。

「ほんと、馬鹿みたいだ」

「馬鹿じゃありません！！……オレも大好きな人がいます。その人に、大好きな人がいると、言われました……。つらいです…あちこち痛くて、おかしくなりそ――」

ちゅ。

おかしくなりそうと言いかけて、唇に柔らかい何かが触れた。

「それ以上言うな。言わないでくれ……頼むから」

「え……演料こそ、泣かないで下さい。オレはそんな顔見たくないです。演料は……笑顔が似合います」

頬を伝う涙をポケットから取り出したハンカチで拭く。こんな時なのに、綺麗な涙だな、なんて思ってしまう自分が恨めしい。

悲しいけど、この人の泣き顔は見たくない。

だから、我慢したくなくても我慢しよう。演料の幸せを願おう。
たとえオレが失恋したってかまわない。

全ては、この人の最高な笑顔のために――。
オレは今演料からしてくれた、触れるだけのキスだけで十分だから
……。

不自然な言動☆（前書き）

今回は妃琉×唖摺の先生ズです！！

不自然な言動☆

ＰＭ１０：００
羅槻家にて。

隣で妃琉の枕に顔を埋めている、恋人こと唖摺をわしっと捕まえて頬にキスを落とす。いつもしている黒縁のメガネをしていないせいか、少し不自然な感じがした。
綺麗な事に変わりは無いが。
「演料が瑞南を持って帰った」
「近いうちに落ちるに十万」
「結婚までたどり着くに百万」
「式は海外であげるに一千万」
またもや始まる賭、イン羅槻家。対象は相変わらず例の二人。
「まぁ……オレも同じ事してるけど」
演料が瑞南を持って帰った様に、オレも唖摺を持って帰ってきた。
久しぶりに来いよと言った時の嬉しそうな顔が、未だに頭の中でふわふわ浮かんでいる。
あの笑顔は冗談抜きで反則だ。正直誰にも見せたくない。
「あいつらが結婚までたどり着くなら……オレだってしたい……。お前と結婚出来るにオレの人生賭ける」
そしてこの言葉である。視線をふいとそらして小さく呟く唖摺はとてつもなく愛おしく感じた。だって、
人生賭けるって事は……。
「オレも賭ける」
一つ一つの言葉に舞い上がりすぎな自分がいる気がしないでも無い

が、この際仕方ない。仕方ないったら仕方ない。どうしようもないのだから。
だって普通、好きな人に人生賭けるって言われたらどうだ？たまらないだろ？制御やらなけなしの自制心なんて、とっくに何処かへ放り投げた。後は感情に身を任せてひたすら一喜一憂するのみだろ。
そう思ったのに。
どうやら恥ずかしくなってしまったらしく、顔を再び枕に埋めてしまった。
そして急な内容の切り替え。

「そいえば、ウィルの話しとんでもなかったな」
「あぁ、あれはな」

ウィルについての話しは理事長に隅から隅まで余す事無く聞いた。
とにかくとんでもない内容だった。まさか芸術的な殺人鬼が殺人をしていなかったなんて……それに、理事長の旧友というのも驚きで。

「……生、とんでもなくキレイだったな」
「……うん」
「……？」

何だ、今の微妙な合間は？

「……うん……そうだな」
「どうした？」

キレイ過ぎて、思い出しただけで鳥肌が立ったとか？
埋めていた顔を頬を挟んで無理やりこちらへ向けると、何故か眉をひそめて不機嫌そうな顔をしていた。
「どうしたんだよ」

「っ、なんでもない！！」

ぶっと頬を膨らませて懸命に視線をそらそうとしているけれど、今度はそらせない様にじっと見つめる。唖摺が何だかおかしい。

「……な、でもなっ」

「全然何でもなくないだろうが」

ベットに組み敷いて額に額をこつりとあてた。とたんにかぁっと真っ赤になる耳や頬にそろそろと指先を這わせる。

「ひりゅ、何す「無理には言わせたくない。でもお前が不安を持つ事はオレがつらい」

分かるな、と耳元で囁くとこくりと小さく首を動かす。

「……でも言いたくない。今のオレはオレが一番認めたくない」

むっつりしながらそう言う彼の決意は頑なで、オレなんかには聞き出せそうに無い。実は聞き出したくて仕方が無いのだが、こうなったらもう諦めよう。

だけど、その代わり。

「分かった。その代わりに、オレの言う事、一つ聞いて」

「ん、いいよ」

やっと笑顔が戻った事にほっとしつつ、調子に乗って一つの願い事を。

大学院時代、うつむく度に唖摺がしてくれた大事な思い出。

前を向けと力をくれた。

「あれ、して」

普通はあれで分かる筈がないのだが、大学院時代並外れて仲が良かった二人には十分だ。
それ故に。

にこりと微笑みを浮かべた唖摺は、妃琉の頬を手のひらで包み込んでちゅ、とおでこにキスを落とした。次は両方の頬に。
最後は唇に。

「どうだ」
「参った」

あはははっと久々に二人して大声で笑ってぎゅっと抱きしめ合う。
その暖かくて、男性特有の体格にドキドキなるようになったのはいつからだろうか。分からない。
ただ、気づいた時には手遅れだった。

「なぁ妃琉、そろそろ寝よう」
「あぁ……そうだな」

妃琉がバカ笑いするなんてめったに無いし。レアな所見れたって事で。じゃあお休み。

にやにやしながらそう言って、ふわふわのベットに身を任せると一瞬にして寝息をたて始める。
速すぎるだろうと苦笑いしながら突っ込むとぐっと体に負担がかか

った気がする。
流石に今日はいろいろ有りすぎて疲れたようだ。
ウィルについて考えたい事はいくらでもあったが……
――今日は、まぁいいか。
唖摺の先程の言動も気になる所が多々あったけれど、今日は考えるのをやめる事にした。
脳を働かせるには、この眠気と全然お友達で無くなった時の方が良いだろう。

お休み、唖摺。
良い夢を。

ｎｅｘｔ…

「ごめん」
そして妃琉が完全に寝付いた時、ぽそりと小さな呟きが。
「見苦しいよな、嫉妬なんて」

ウィルが綺麗だったと言ったその言葉に感じた胸の奥がもやもやする様なあの感情。勘弁して欲しい。
あんな感情、気付かれる訳にはいかない。だって、見苦しいだろっ？！あればっかりは、絶対絶対気付かれたくない。

――妃琉に嫌われたくない。

大学院時代の、尊敬できる先輩であり良き友達であり、途中から恋人となったこの人は今の……過去の、そして未来のオレにとって一番大切な人。こんな人に嫌われたらオレの人生は終わったも同然だ。

となりで小刻みに寝息を立てる妃琉をぎゅっと抱きしめて、瞳を閉じる。

「お休み……大好き」

それからしばらくして、不安と共にまどろみの中へ沈んでいった。

のんべぇに話し合いは通じない☆（前書き）

私の周りにのんべぇが多い事から思いついた話しです。
しかも無駄にお酒に強い…
彼ら程では無いですが（笑）

のんべぇに話し合いは通じない☆

「今日も一日お疲れ様、かんぱーい」
「かんぱーい」

チン、とグラスの軽快な音をたててぐびぐびとお酒を飲み出す“学生達”と比成。その学生達とは、憂麻、至軟、麻矢、琉峡である。憂麻と麻矢は財閥の息子達という事から公の場では無いが、付き合いで飲む事が度々あった為、多少の耐性が出来ている。至軟と琉峡も親が親なだけに幼い頃から飲むことが多々あったのだ。という事でいっちょまえにお酒と夕飯の時間。
ちなみに一番強いのは麻矢だったりする。
でもさ、だからって……

「ウォッカのストレートは無いだろ！！」

思わずでかい声を出してしまう比成である。そんな比成に対しても涼しい顔。いっそすがすがしい。これからの対策を練る為に彼らの豪邸に来た訳だが。
まぁお酒でも飲みましょうよにも驚いたが、麻矢の飲みっぷりには最早感服だ。

「気にしないで下さい。麻矢が酒に強いのはのは昔からなので」
「とか言いながら、憂麻……お前もあり得ないぞ、芋焼酎の水割りって何だ」

完全にオヤジじゃないか。
『とじゅ』とラベルに書かれた芋焼酎を片手に、至軟の作った夕飯をあぐあぐしながらまんべんの笑みを浮かべている。

だけど確かに至軟の夕飯は極上だ。
今日のメニューはひじきの鶏つくね、わかめとイカの酢の物、かつおのたたき、ツナサラダ。流石お年頃。このメニューの多さときたら。ふぅ、とため息をついて今日あった事を振り返る。
一日目から三日目は文化祭を堪能してくれ。勝負は四日目からだ。
それでも細心の注意を払って行動する事。
オレにそう言われた通り文化祭を楽しむ事にしたようだ。
午前はそれぞれ好きに行動し、午後はホストクラブでおもてなし。
亜美と甘音の睨んだ通り、女装メンバーをリードしながらのチームでの接客は大成功。利益は一日目にして五十万円に達した。
ただし効率が異常に悪い為、比等学園にＳＯＳを頼むらしい。だったらチームでの接客は止めれば良いだろうと言ったら却下された。
それでは今年の醍醐味が無くなると長ったらしく説明してくれた。
彼女達にも感服だ。

にしても。

「麻矢、次は葡萄酒か……？」

すげぇこいつ。オレも飲んだけど（流石に水割り）、それだって２杯位。ほぼ一人で空けちゃったよ……。
でももっと凄いのは、こんなに飲んでるのに頬が少し赤くなっている程度。何かもう常識外れだ。

「美味しいですよ」

にこーっと微笑む常識外れ君。
ほぼ酔っていないと思っていたけど、そうでもないようだ。
普段むっつりしている麻矢がにっこりである。実に似合わない。

「理事長、失礼です」
「はいすみません」

どうやらアルコールが入ると勘の良さがグレードアップするみたいだ、恐ろしい、気をつけよう。
内心そう誓っていると、知ってか知らずか類香がこっそりと携帯の画面を見せてきて。

『麻矢はアルコールが入ると勘所かほぼ心を読むに近くなるので気をつけて下さい』

そこにはこんな事が……。
うん、忠告は嬉しいけど二人して人の心を読まないで欲しいな……。
若干青くなる比成。
お疲れな事だ。

「あぁうめぇ。それでどうするんだ？」
「えっと、とりあえず――はっ？！」

至軟……お前もか！！

「何でお前らはそうのんべぇなんだよ」
「え、美味いよこれ」
「……そうじゃねぇ」

何て突っ込み所満載なんだ。
呆れたを通り越して関心するわ、まじで。

「氷結かよ」
「やっぱりグレープ！！」

お前ら飲みすぎだ……。
これではいつ本題に入れば良いのか分からない。

「ほら、比成も飲んで」
「はいはい」

分かった。無駄だと分かった。
よし、話し合いは明日に回そう。
こうなったら負けてらんない。

「飲み比べだっ！」
「乗った」

既に相当な量を飲んでいる麻矢が直ぐに名乗り出る。
そして憂麻も琉峡も乗るけれど。
「オレは良いや」

何故か至軟がパス宣言。
そこまで酔ってる感じしないけど。

「領がそれ以上飲んだら相手にしてあげないって言うんだもん。オレは酒より何より領優先だから」

ごちそうさまー
律儀に手を合わせて領の分もついでにお皿を下げる。洗い物もしてから、領可をぎゅうーと抱きしめながらクスリと笑って耳元で呟いた。

「さてと。じゃ、きっちり相手してもらうからな」

おーおー酔っ払いの相手は大変だなおい。
「やっぱりオレも遠慮しとく。類が寝た」
麻矢の膝枕でくーくーと気持ちそうに寝ている類香の頬を、愛しそうに愛撫して姫抱き。それじゃあ。
そう言う麻矢は既に酔いがさめたようで、足取りはしっかりしている。

「相変わらずの純情カップルだな」
「いつもの事だよ」

マッコリをあおりながら何でもない様に琉峡が返事をする。
おいし〜！
そして極上の姫スマイル。
ハグする憂麻。キスする琉峡。
押し倒す憂麻。足を絡める琉峡。よしもういい今日はやめだ。

手早く皿類を片付けてリビングを後にする。
純白の生地に金色の刺繍が入った絨毯を、さっさと歩いて借りる事になっている部屋に向かった。

家と言うより豪邸。住んでるのは見た目はみんな綺麗で、中身はオヤジ率高いのが半数以上。
学園の生徒の憧れである彼らの意外な一面が見れた気がして、何だか距離が縮まったと思った。

――さぁ、歯を磨いてオレも寝るか。

良質な酒と適度な疲れで良い眠りにつけそうだ。

弟が弟なら、兄は兄☆

髪をさらりと肩から零して、礼を言うと気にしないでと微笑みながら背中をぽんとされる。それに対してもう一度頭を下げようとしたらぐいっと止められ、ハテナマークを沢山浮かべていると苦笑されてしまった。

「すぐに頭を下げちゃ駄目だよ。分かった？」

「はい比等さん」

「うん、素直で良い子だね」

髪をふわふわと撫でられたら自然に頬がゆるむ。

何だか面倒見の良いお兄さんって感じの比等さんは本当に色っぽくって、綺麗で――って、私は何を……。ふいっと視線を逸らすとクスクス笑われてしまった。

「あああもう。真っ赤になっちゃって」

「あ、ぁ……えっと」

「可愛い」

「うぅ……」

どうしよう……顔、まともに見れない……。

「いい加減にしろ変態」

ばこんとタウンページでぶったたかれて我に帰るみたいな顔をする比等さん。そしてそっか早く持って帰ろうと口走って再びタウンページの刑。

兄をタウンページで殴るなんて酷いよ比成黙れば殴らない無理だよそれはじゃあ殴るあっは凶暴だねタウンページの正しい使い方知ってるあぁ知ってるぞ変態を自重させる時に使うんだろ

数時間前のやりとりを思い出してクスリと笑みを零すウィル。

比成学園の兄弟校である比等学園の理事長である牙王　比等（ひなと）。（実際比成と比等は兄弟）
実は警備が一番優れているのが比等学園の地下にある彼の家の為、ウィルを寝泊まりさせる所をそこに決定したのだが――。それからしばらくは二人の面白おかしいケンカタイムで、比等邸に着いたのは午後９時。すっかり外は真っ暗な時間になってしまった。

「大丈夫？流石に疲れたでしょ」
「あはは、まぁ、かなり」
苦笑いを零してそう言うウィルの頭をよしよししてくれる比等に対して、再び心臓が跳ねる。
とくん、とくんと音が耳まで聞こえる様な気がして気が気ではない。頬を火照らせて自分より少し背の高い比等を見上げていると、何故か首筋にキスが降ってきた。
「っ！！ひ……なとさ……」
わなわな震えて頬所か体中を真っ赤に染めて恥じらっていると、ごめんねという呟きが。
比等を見上げると
「こんな事しちゃいけないって分かってるんだけど、ね？我慢出来なかった……」
ぎゅっと抱きしめられて、甘いようなほろ苦いような不思議な気持ちが広がっていく。
私はどうしたら……。
「何でだろうね……オレ初対面の人にこんな事する程軽くないんだよ」
その事に対しては比成も言っていたが、こいつ口は軽いけど手は出さないから安心してと。ならこれはどう説明出来るのだろうか。
内心試行錯誤しているとごめんね、ともう一度言われて比等の体温が離れる。ショックを受けている自分が分からない。

「さ、行こうか」
腕を引っ張られて連れて来られたのはロビーだった。そこは去年まで住んでいた城程ではないにしても、十分広くて綺麗。落ち着いた黒と白統一なのも比等らしかった。隣り合った黒皮のソファーにお互い腰をおろして視線を合わせる。
「さっきも言ったけどここの設備は日本でも随一だから安心してね。警察が踏み込んで来る事も無いから」
「はい。……あの、本当に置いて頂いて良いのでしょうか？」
「いいのいいの。どうせ一人じゃ寂しいし。来てって言ったのはオレだよ」
悪戯っぽく微笑んで髪に指先を這わせる様な、一つ一つの言動があまりにも優雅で、思わず見とれてしまう。

ってだから私はさっきから何を……！！
「比等さん。……今後の事について、少し話し合いをしませんか？」
自分の中に湧いて出てくる気持ちがよく分からなくて、何とか話をそらせる。するとそうだね、とウィルに乗ってくれた。
ちょっと安心。
「きっと比成達はろくな話し合いにならないからね。みんなの携帯にどうするか送ってあげないと」
「そんなに酷いんですか？」
「あはは、酷いよ。こればっかりは確信出来る。さて……どうしようか？」
「比成と話し合ったのですが……ルルィをさらった奴らの真の職業は人身売買。主に未成年の美しい男子を標的にします。こんな事はしたくないのですが……もしも彼らの合意が得られれば、囮になってもらおうと」
合意なんて、得られる内容じゃ無いけれど。
「そっか……人身売買ね。確かにあの六人なら高く付きそうだし、囮にはもってこいかも。……でも彼らの標的は未成年の男子でしょ。

ルルィちゃんは女の子だよ。どうして狙われたんだろう。もっと他に理由がある気がする」
「それは……確かに」
今の今まで気づかなかった。
言われてみれば納得だ。彼らはどうしてルルィを狙ったのか……また謎が増えてしまった。
「比成と話し合った結果、良い人材を六名準備しておくからルルィを返せと要求し、比成学園の最上階に呼び出す事になりました。奴らはそう簡単にルルィを返してはくれないでしょうが、来るだけでも来て欲しいと言えば下っ端だけでものこのこ出てくるでしょう。そこから芋づる式で幹部や首領を引きずり出す事にしました」
「なるほど……でも、下っ端だけでも来るという確かな保証はあるの？」
「あります」
奴らは今の所良い人材がルルィ位しか見つからず、金に飢えている。彼女を売り飛ばせばいくらでも金は入るが、手離すのが惜しくて出来ないようだ。というのが今の所使えそうな情報。それ以外は情報が全く掴めない。
だから数少ない情報でやりくりするしか無い。
「勝負は四日目からというのは、どうして？」
「彼らには三日間は文化祭をきっちり楽しんでもらうためです。文化祭中に被せたのは、早めに事を行いたいと言ったら比成がそう提案してくれました」
「分かった。彼らにはそうメールしておくね。それにしても比成はそれだけ言えば良いのに、どうして家にまで行く事にしたんだろうね？」
「う～ん……何故でしょう」
何て言ったって、すごーく謎だから。比成って。
「今回の事ってかなり大事ですし、彼らにそれをきちんと説明するためでしょうか。内容が内容ですし」

あ、かもしれない。
納得いったようにぽんと手をたたく比等さん。そして突如妖艶な微笑みを浮かべる。
「まぁオレは凄く感謝するよ」
「どうしてですか？」
「だって、君と一緒にいれるでしょ？――さてと。シャワールームとか、寝室とかリビングとか案内するから」
楽しそうにお手をどうぞ、と差し出されてそっと指先を重ねる。と、指を絡められてゆっくりとリードされる。
何で何もかもが様になるんだろう……。
横を歩く比等をじっと見つめると、何故かもう片方の手のひらで目隠しをされた。
「駄目だよ」
「え……？」
「あんまり見られると、うれしくなっちゃうから。分かったかな？」
ぱっと手のひらを外されるとばっちりと視線が合う。
「駄目なんですか？」
そうしていると、素直な言葉がぽろりとこぼれてしまう。
綺麗な瞳に吸い寄せられて。
「あなたを見ていたい……」
何を言っているんだともう一人の冷静な自分が言うけれど。
「駄目だよ。誘惑に負けちゃうでしょ」
「負けてください」
何故かこの人が気になる。
これが一目惚れなのかもしれない。
「先に言っておきますが、私は別に軽い訳ではありません。……あなただからです」
「……くくっ。あはははははっ。何でそう可愛い事言うかな。ウィル、オレをどうしたいの？」
とん、と壁に寄りかかって上目遣いで見上げてくる。

「どうしたい……んでしょう…分かりません。どうしたいのか、どうされたいのか……」
分からない。私は……。
「うん分かった。とりあえずお風呂一緒に入ろうか」
「ぶっ」
柄にもなく吹き出すウィル。
何故こうなるんだろう。比成も分からないけど、比等さんはもっと分からない。
「裸で親睦深めようってあれ。深い意味は無いんだよ。あ、それとも。

――深い意味があった方が良かったかな？」

妖艶さをさらに深めて、一瞬にして骨抜きにする。行こうか。何でも無い事の様にウィルをシャワールームへ連れて行き、そこから

「ひ、比等さんっ、ありえません！！」
「え、そう？いじめてあげるから早くおいで」
「ひあぁあああ」
「あはははははかわいーちゅ」
「……ばた」

……比等の本領発揮、かなり怪しいお風呂タイムが始まったのだった。

弟が弟なら、兄は兄☆（後書き）

比等は書いていて凄く楽しいキャラだと判明したので、これからどんどん出していこうと思います　笑

番外編　至軟×領可　不安☆（前書き）

今回は至軟と領可の番外編。
短時間で書いたのでクオリティの低さには突っ込まないで下さい（^。^；）

番外編　至軟×領可　不安☆

『やっぱ異性じゃないなんておかしいと思うんだよな、オレ』
『え？』
『だからもうオレはお前を好きでいるのはやめる。じゃあな』
『え、ちょっと待てよ！！何だよそれ……おい！！！！』

嫌だよ、何だよそれ。
オレはまだ至軟といたいのに……。嫌われちゃった。どうしようどうしようどうしようどうしよう……夢なら醒めて。
あまりの悲しさに頬を雫が滴った時……。

「…ょう……ょ……りょう」

少し焦った様な至軟の声。
幻聴かと思ったけれど、それは確かに至軟の声で。

「よか、た……夢」

ふわりと微笑むと、とたんに涙が沢山頬をつたう。
悲しくて苦しくてつらいその言葉は夢だったのだ。訳も分からないまま、きつい位に抱きしめてくれる至軟の腕の中で泣きじゃくりながら、つっかえつっかえ事情を話した。
するとばかだなぁ……と小さく呟きがもれる。

「何が良くてオレがお前を好きでいるのやめるんだよ。異性じゃない？関係あるかそんな事。オレが好きなのはまぎれも無く領で、他はどうでもいい。分かったな？」

耳元で低く囁く、良く通ってドキドキする声。
オレを落ち着けるかのように、ゆっくりと言葉を紡ぐ。
「うぅうっ……し、しな…んっ……」
それでもあの夢のダメージは信じられない位大きくて、情けなく震えてしまう。
普段から気にしていた事を夢で見て、さらに現実味を増したそれは、領可の心をずたずたにしていたのだ。

しがみついてぼろぼろ雫をこぼしながら見上げてくる領可は、未だかつてない程不安そうな顔をしていて、見ているだけでも胸が痛む。
「領……なら、不安は全部オレがぬぐってやる」
オレがどれだけ領の事好きか、分からせてやる。
髪をふわふわと撫でながらにこりと微笑みかけると少し安心したような表情になる。それに少しほっとしながら手の甲に唇を落として腕をぐいっと引く。
「へっ？」
耳の裏に唇を這わせられて慣れない快感にどうにかなりそうになった。
「んっ…耳はだめ……」

だめ、何て言われたら余計したくなるのに。
そのまま首筋を指先で愛撫していると恥ずかしそうに瞳を伏せようとしたけれど、顎をくいっと上げて視線を合わせる。

「まだ少し触っただけだぞ？」
「そう、だけど……」

朝からしたら、夜まで待てない……。頬を真っ赤に染めて嬉しすぎる事を言ってくれる。

「だーめ。不安になる事がもう無いように、いっぱい触らせてもらうから」
「い、いっぱい……」

何を想像したのか、さらに真っ赤になって掛け布団をがばっと被って隠れてしまった。

「だめ！！いっぱいはだめ！！」
おかしくなっちゃう……
涙声で必死に逃れようとする領可。そんな事言われたって、遅かれ早かれすっごく恥ずかしい思いする事になるんだぞ？掛け布団の上から抱きついてにやにやしながら囁くも、だめの一点張り。意外に頑固なんだな……。まぁそれも可愛いんだけどさ。顔見せてくれたって良いでしょ？だめ。どうしても？だめ！！

仕方ない。それなら。

「ん、分かった。そうだな……まず着てる物は全部剥いで、全身楽しく観察。それから、嫌がっても無理にいじめる。詳しく言うと――」

「分かった、分かった分かったから！！」
「不安とか言ったら「言わない！！オレは至軟が大好きだから……もう思わないし、言わない。不安になった時は……その、また……
……慰めて」
「うん、分かった」

ようやく掛け布団をまくり上げる事に成功して真っ赤な顔を拝む。ちょっと唇を突き出してむっとしたような表情をしていたけれど、先程の不安そうな瞳の揺らぎはもう見当たらない。

「良かった」
「うん……ごめん」

ありがとう……。
耳元で囁き返してくれる。それが嬉しくて、領可をベットに押し倒した。

「約束は？！」
「約束？恥ずかしくしないって？」
「うん」
「忘れた」
「は？！」

にやりと笑って体中を触り回してあんあん喘ぐ様子を楽しそうに見物する。

「はっはっは、喘げ喘げ」
「ばかー！！変態！！」

何とでも言え。オレはお前が不安を忘れてくれれば何と言われても

構わない。

オレはお前の為なら何でも出来るんだから。

心の中では純情な事を囁きながら、領可とはあまり純情では無い戯れを続けるのはどうかと思うが。

この際は無視だ。

したいんだから仕方ないだろ。

覚悟☆

ブー、ブー、ブー、ブー。
次の日の朝、憂麻は携帯のバイブ音で目を覚ました。
眠たさに目をこすりながらスカイブルーの携帯をスライドさせると、
そこには比等さんからのメール。

――朝っぱらから何だろう…。

ｆｒｏｍ　比等さん
ｓｂ　送っておくね

おはよう。昨日話し合いは出来たかな？
ってまぁ、出来てないんだろうなと思ってこのメールを送ったんだけどさ。

ウィルから聞いたんだけど、結構凄い内容だよ。嫌だと思ったら、今すぐこのメールを消して、君たちは文化祭に専念する事。覚悟が出来ているなら、ここから先の本文を読んでね。

要件はざっとまとめるとこんな感じ。
1、ウィルの妹のルルィちゃんを誘拐した奴らの本職は人身売買。
2、その際の標的は未成年の綺麗な男子。

さぁ、ここまで来れば分かるよね？君たちに奴らをおびき出す囮になって欲しい。
強制はしないけど、ここまで読んだなら協力してくれるよね？やっぱり一晩一緒にいただけあって、ウィルに情がわいちゃったんだよね、オレ。みんな、宜しくね？

―ｅｎｄ―

何て言うか……
比等さん、流石だな……そんな事まで見抜いてたなんて。
でも確かに内容は過激だ。過激過ぎる。だから正直、琉峡は巻き込みたくない。

ぽすっと枕に頭をうずめながら琉峡の寝顔を見る。
巻き込みたくない。こいつだけは。

ブー、ブー、ブー、ブー。
再び携帯のバイブ音。
また、比等さんから。

『二回もごめんね。でもこれは憂麻個人にあてたものだから、許してね。琉峡と仲が良いのは誰って聞いたら、憂麻だって麗奈ちゃんが言ってたから。
忠告しておくよ。琉峡を行かせるのはやめた方が良い。琉峡は空手の全国大会行った時、テレビ映ったでしょ？あれ以来奴らは琉峡に目を付けたみたい。だから危険だと思うんだよね。一番有効な囮になってくれそうだけど危険過ぎる。憂麻からもよく言っておいてくれない？』

信じらんない……琉峡が。

頭が真っ白になる。もしもこれが本当なら、危険だ。やっと自分の気持ちが分かって、琉峡もオレの気持ちを受け止めてくれたのに。
人身売買が本職の奴らに目を付けられていた……？

「ゆーま？おはよ」

どうやら気が動転している内に目が覚めたらしい。おはようと返すとにこりと微笑みをくれる。

その微笑みを見ているとやりきれなくなってきて……。

――何でこいつなんだよ。

何で……。何で、オレの大切な人を奪おうとするの……。

「頼む……行かないで」
「だめだよ。オレは行く」
「……え？」

これまた動転している内に自分の携帯に来ていた比等さんからのメールを読んでしまったらしい。

「いやー、実は最近オレストーカーされてて。一人じゃ不安だから行く」

マジかよ。もうそんな事されてたのか。

「これ、読んで」
「？うん」

琉峡に比等さんから来ていたメールを読ませる。と、だんだん表情が険しくなっていった。

「そのストーカー、奴らかもしれない。珍しく外人さんだったから……」

琉峡がストーカーされるのは珍しくないが、外人と来たら……やっぱりそうかもしれない。

「オレは行く」

「っ……」

「自分ばっかり安全じゃ嫌だもん、ね？」

にこりと微笑みをもう一度くれるけれど、その微笑みには覚悟が見え隠れしていて、オレがどうこう言える事じゃないと理解した。

簡潔な状況説明☆（前書き）

私情ですが、コスプレイベントに行ってきました。キルアやビスケといった愛しのキャラに会えた為、非情にテンションが上がっております。ただでさえ多い誤字脱字がさらに多くなっている可能性があるので、見つけたらこっそり教えてくださると幸いです……。

以上、ララからでした。

簡潔な状況説明☆

午前九時現在、ホストクラブメンバーは……

憂麻：女装した琉峡と女性をリード中、その女性がのぼせて倒れてしまったため、姫抱きして保健室に運んでいる最中

琉峡：二人でリードしていた女性が倒れてしまったため、憂麻が女性を姫抱きして保健室へ運んでいる横で荷物持ち

至軟：二人一組形式に関わらず二人のお客さんに同時に指名されてしまったため、一人で接客。そのお客さんは彼女が至軟を好きになってふられた為、復讐にいった筈が色香にやられてホモ化。それに気づきつつ、さらに色香を振りまく

領可：一人で接客中、男性客にセクハラをされそうになるが、これまでの経験をもとに回避。逆に美脚を使っての色仕掛けをして卒倒させる。にやりと笑ってのんびりタイム

麻矢：昨日のお酒が実は残っていて、あまり笑わない筈の麻矢がまんべんの笑みを浮かべてしまったため女性客思考停止。何とか気を確かにさせるも、再び思考停止

類香：麻矢のまんべんの笑みにやられふわあんとなる。頬を染めてぼんやりしていると廊下にいるお客さん達と視線が見事に合ったため、ふにゃんふにゃんになったままえへへと笑うとみんな一気に魂を飛ばしてダメージ大

比等に文化祭を手伝えと言われた比等学園の生徒達十人：急な事に

関わらず華麗に活躍

理事長組は……

比成学園理事長、比成：昨日の稼ぎがいくらか計算中。けれど脳内は三日目以降の事でいっぱい。柄にもなくテンパる

比等学園理事長、比等：六人から提案を許可してもらえてウィルと理事長室でメール文を作成中

そして出来上がった文面は……

ｆｒｏｍ　ウィル
ｓｂ　ルルィについて

あなた達の望む通り、私は非情な殺人鬼となりました。きっと世間の目は酷く冷たい事でしょう。あなた達の目的は達成出来たはず。お願いですから、ルルィを解放して下さい。

あなた達はお金に困っていましたよね？一生遊んで暮らせる位、売れそうな人材を多数見つけました。彼らとルルィを交換して下さいませんか？あなた達にとってルルィは手放しがたい存在となっているみたいですが、来てみるだけでも来てみて欲しいのです。宜しくお願いいたします。

もしも来て下さるのなら、明日7時比成学園の正門に来ていただきたい。比成学園の理事長は抑えたので、何の遠慮も必要ありませんが一般客にばれると色々面倒な事になってしまうので、お忍びでお願いいたします。

―ｅｎｄ―

「まぁざっとこんな感じかな。送るよ？」
「はい。……ですが、今更ですけど食らいついてくれるのか心配になってきました……」
そうだねぇ、と比等にまで言われると流石に不安げな顔になってしまう。けれど大丈夫だよ、そう言って頭をふわふわ撫でられると、不安は少し薄らいだ。

そしてその頃の敵の首領は……

一生遊んで暮らせる位の人材……か。ふふふ、面白い。行くだけでも価値があるかもしれないな……。下っ端に行かせるとしよう。

そう、敵の首領は凄く単純だったため、まさか芋づる式で釣り上げられる事になろうとは夢にも思っていなかった。

敵組織の判断☆（前書き）

今回は敵組織側で書いてみました。正直キャラがかなり濃いです…

…

敵組織の判断☆

「首領！！罠であるのが見え見えです、行くのはやめましょう！！」
「ははは、そうかもしれないが一生遊んで暮らせる位の人材をたんまりだぞ？行かない手は無いではないか」
「ですがっ、」
「肉を斬らせて骨を絶ーつ！！」
「首領っ！！分かりました、僕も行きます。首領の覚悟、しかと見せていただきましたぁっ！！」
「ユリくんっ！！」
「首領っ！！」
駄目だこりゃ……。
相変わらず首領とユリの馬鹿コンビが馬鹿漫才を繰り広げる。いい加減勘弁して欲しいものだ。
「なぁ、今の明らかに意味合い違ったよな？」
「あら、いつもの事じゃないの。しかも確かにこれはチャンスよ。出来るものなら私は一生下僕と共に平和な毎日を送りたいし」
「いや、それ、平和って言わないんじゃ……？」
「何か言った？」
「何も言っておりませんすみませんでした」
「うむ、よろしい」
めちゃくちゃなのはあの二人では無く、この組織自体だな……。
小さい頃に首領に拾われ育てられ、感謝はしているがそう思わずにはいられない。
この組織はこんなでやっていけるのだろうか。
確かにこの下僕沢山のミマリアは銃や爆弾を使った殺人の天才だし、ユリはナイフ使いの天才で、首領に忠実で、忠実過ぎる位忠実で首領の為なら何でもしちゃうけど。
「ユリくん、今夜は盛り上がろう。大金が入る前の最後の晩餐だ。

食事が終了次第、私の部屋に来なさい」
え？
「はい首領！」
……え？
「私がじかに、じかに調教をぐあふぅ！！」
それは駄目だあああ！！
お前はユリに何をするつもりだ！！！！
余りの事に相手は自分の恩人で、組織の頭だという事実を忘れて顔面に跳び蹴りをしてしまった。
「首領、首領！！大丈夫ですかぁ、ユリ悲しいですぅ」
「ユリくん……心配してくれるのか……嬉しいなぁ。私は幸せだよ」
「しゅりょー、かなしいー。ルルィもかなしいよー」
「いくら棒読みでも、私は嬉しいよ……ルルィ、君も心配してくれるんだねっ」
「首領……うえーん！！逝かないでええ！！」
「さっさと逝ってこいいかないでー」
「ああ大丈夫ですか。首領、首領が死んじゃったらオレどうしたら良いんですかー。ルルィは任せて下さい。大事な彼女だし。他は結構どうでもいい」
「ハヤキ、お前はどうして棒読みなんだ。ユリくん、ルルィ、君らだけだよ、私を本気で心配してくれるのは。ルルィの最初のセリフは気になるが、それでも私は嬉しいっ」
「首領おぉお！！ぼくかなしいです！！」
「ユリくん、ユリくん、素敵だよ。君は何て可愛いんだっ、首領トキメいちゃう！！あ、今日の下着はカボチャパンツなんだぐぅええ」
「テメェやっぱさっさと逝けよこのロリショタコンプレックスめ」
ルルィ、本性発動。その儚げな容姿とは裏腹に結構黒い。かなり黒い。
ぶっ倒れている首領の腹をばこばこピンヒールでやる様子は最早清々しい。流石オレの彼女だ。

ふぉ、ぐぁおと首領が悲鳴を上げるがこの際無視だ。ルルィ、オレの分もばっちりやっといてくれ。日頃どんだけ迷惑かけられてると思ってんだ、この変態。いや、変人。
ミマリアはと言えば、下僕の餌を買いに行ってくるとスーパーに行ってしまった。何だかんだ言って、この人はドSなだけじゃないんだよな。料理上手だし、家庭的な面も沢山ある。意外に良い人。

「さてと、首領。どうするんです？」
「どう、ぐぇするとは、ぐはぁ、何がっうぉぶ」
「下っ端に行かせようとか言ってましたが、あなたがずっと目を付けていた投坂琉峡が通っている学園に行くんですから、ついでに偵察って事で行かないんですかという意味です。ウィルがわざわざ比成学園を選んだという事は、比成学園の生徒を抜擢している可能性は大でしょうし、もしかしたらその中に彼もいるかもしれませんよ」
「おぉお、ぶえなるほぐぇ。それはいぐょうぼ」
うん、流石に可哀想になってきた。
「ルルィ、そろそろ止めてやれ。ピンヒールが可哀想だ、汚れるぞ」
「えええ、そっちぃぐぁあ」
「五月蝿い黙れ。うんそうだね、ヒール可哀想」
せっかくハヤキが買ってくれたのにね、と小さく微笑む。本当に可愛いやつだ。
「それじゃ、首領共々幹部が赴くと伝えておきます」
相手側、びっくりするだろうな。まさか幹部所か首領まで来ちゃうなんて想像してもいないだろうし。
はぁ、楽しみになってきた。

いざ、取り引き！！（前書き）

お久しぶり？です。
ついにここまで…
やっとだ（泣）

次話はどうなるんでしょう…←オイ

いざ、取り引き！！

朝。比成学園、正門。

「準備は出来たな」
首領の言葉にこくりとメンバーが頷く。

今回の事は、二度とあるチャンスでは無いだろう。
あのウィルの保証付きの人材。そして、嘘では無いという事を確かめるために、六人の写真を送ってもらった。

その写真の人物達の面々は、確かに豪華だ。
首領はと言えばお目当ての琉峡がいたのを知った途端、日の丸のセンスを両手に持って踊り出した。そしてミマリアも踊り出した。それについては謎だ。

名波財閥の双子。
地位も名誉もある、日本だけで無く世界からも注目されている二人。
兄、名波　憂麻。
ドＳ要素満載の美男子。このメンバーの中で一番の長身で、意外に不器用な所あり。それが母性心を煽るようで、二十代から三十代の女性にモテる。当然ながら男にもモテる。

弟、名波　麻矢。
兄とは違い、しっかり者。長い髪は両親の趣味のせい。美男子なのは兄同様、父同様。優雅な物腰で、とても優しい。口下手な所はあるが、頼れるお兄様気質。当然ながら男にもモテる。

父も母も武道家の投坂兄弟。

兄、投坂　至軟。
合気道の有段者。珍しい青髪だがれっきとした日本人。物凄い節操なしで、至軟の後ろには裸の男が大量発生状態だったがとある人物に惚れて改善された。（それが誰だかは分からない）見てくれは、言うならば女性の様な綺麗さを持っている。節操なしでは無くなったが、かなりの遊び人。そのくせ勉強はピカ一で、比成学園創立以来の天才と言われている。

弟、投坂　琉峡。
空手と合気道の有段者。空手の全国大会で二年連続優勝と実力は兄をも上回る。その可愛いらしい容姿で何度かテレビ出演を果たしている。しかし容姿とは裏腹に本物の強さを持つ事から比成の猛者姫が二つ名。

スポーツ万能の砕楽家。

唯一関係がいとこ同士な二人。

年上の砕楽　類香。
バドミントン界では知らない者はいない程の腕前。大会で見事全国優勝を勝ち取り引退。ふわふわとしたムードメーカーで、いつも女神のような微笑みを浮かべている。努力家で、比成学園現在中三の首席。

年下の砕楽　領可。
暇になると人のいたずらに走る困ったちゃん。陸上部の長距離専門。大会では四十度近くの熱を出したくせに周囲の反対を押し切って出場。当然の様に全国優勝し、人々の度肝を抜いた。生脚がとんでもなく綺麗で、領可の脚を拝む為に大会を見に行く者が多数いるらしい。

「まぁ、私も見に行ったけど、あれはたまらないわよ」
「行ったんかい！！！！」
これらの情報は全てミマリアのもので、何故そんなに詳しいんだと聞いたら

「みんな私の下僕候補に上げてるからよ」

当然の様な顔をしてにやりと笑うミマリア。
あぁ、だから踊り出したのか。

「ルルィ、これだけの面々を集めたって事は、あなたの兄さん本気よ。本気であなたを取り返そうと思ってる」
「うん、私も思う。いっそ侯爵じゃなくてハヤキが好きだから私は帰れないて言おうかな……」
「うわー……オレお兄さんに殺されそう……」

あの人、無駄に綺麗だから怒ると迫力あるんだよなぁ……。
ルルィをさらった後、ミマリアとウィルの様子を見に行った時の事を思い出す。
そして。

さぁっ……と血の気が引いた。

めちゃくちゃ、怖かった。オレ、オーラだけで人って殺せるんだって思ったもん。

「とにもかくにも、七時まであと少し。ルルィはこちらに置いたまま、彼らをさらう。本当に、準備は良いな」

日の丸のセンスをパチリと閉じる首領。
その首領と腕を組んでこくりと緊張気味にうなずくユリ。
彼らに早く会いたくてうずうずしているミマリア。
ウィルに合わせる顔がないと若干顔面蒼白のハヤキ。
いざ、取り引きの場へ――。

七時きっかり、豪華過ぎる位に豪華な正門へ、日本人形のような髪型の長身の女性が迎えに来た。

「はじめまして。比成学園の生徒会長を勤めます、今日はあなた達の案内役をさせていただくので、お見知りおきを」

どうやら彼女は、女性では無く女の子の部類らしい。大人びた顔立ちや長身な事、制服を着ていない事から既に成人しているものかと思ったが。
それにしても、何故メイド服なんだ？

「わっ、美人さんっ……」

若干百合要素のあるユリが頬を染めてうっとりとする。
やっぱりユリだけに百合？

……すみません冗談です。
「首領のリソルだ。早速だが案内を頼むぞ」
「はい、こちらへ」

まだ生徒は来ていないけれどバレると困るので、念のために裏道を通ります。
あまり抑揚の無い声でそう言う会長に付いてきているのだが……。

これが……

裏道……？！

いや、これで裏道？！！！
信じられれん、流石金持ち学園。
何かもう、オレの知らない世界だ。

そんな事を考えている内にこれまた豪華なエレベーターがでーんと立ちはだかる。黒白統一のシンプルなデザインだが、やはりとてつもなく綺麗で。

ユリがオレの隣で口をぱくぱくしている。
多分、オレも似たり寄ったりな表情をしているのだろう……いや、絶対。

ミマリアは相変わらずにやついていて、首領はいつものヘラヘラ顔をきちんと抑制していた。

ルルィは……、オレのガラガラ引きずるばかでかいキャリーバッグの中だ。

ポーンと音を響かせてエレベーターが止まる。
どうやらここは建物の最上階らしい。窓から見える外には少し遠くに兄弟校の比等学園が見える。
掘り出し物、あそこにもいそうだな……。

「こちらです。どうぞ」

会長がぎぎぃっと両開きのドアを開け、導かれるまま中へと入ると、そこには麻酔か何かで眠らされているらしい六人の少年が。

ミマリアがゴクリと喉を鳴らすのが微かに聞こえた気がした。

ちらりと伺い見ると瞳をきらきらさせている。
何するか分からないから怖えぇ……。

「彼らは強力な麻酔で眠っています」

隣の部屋のドアの影から綺麗な顔立ちの男性とウィルが顔を見せる。
多分あっちが理事長なんだろう。

「好きにどうぞ。しかし、その前にルルィを返して下さい。そのキャリーバッグの中なのでしょう？」
「……分かった。ここに置くから、二人はそこを離れて」

むろん、オレはルルィを手離す気はさらさら無い。
愛しの彼女だし。
事が解決したら交際すれば良いって？
いやいや、あのおっかない兄さんがオレを受け入れると思う？マフィアだよ、専門人身売買だよ？

無理だって……。
そもそも侯爵が怒り狂うって。うわ、侯爵も綺麗だからな……ウィルと侯爵に挟まれるなんて……おっかねぇえぇぇ！！

内心荒れまくりつつ、お互い警戒しながらそれぞれ交換する“者”から離れてる。そしてゆっくりゆっくりと目的の者へと近づく。

すれ違う時――。

すぅ、とミマリアが動いた。それは全く疑う時間すらも与えない、迅速なもの。

「っ、く！！」

あっさりと捕まってしまった“比等”は苦痛の声をもらした。

「あら嫌だ。私達が気付かないと思った？それにしても綺麗ねぇ」

どうやら比等は革張りのソファーの裏に隠れていたらしい。

だが。

私達……か。

オレ、全く気付かなかったんだけど……。

さ、流石ミマリア様。

「二人とも、ごめんね。オレ、足引きずっただけみたい。オレの事は気にしないで。簡単に死にはしないよ」

それでも直ぐに余裕を取り戻す辺り、経験をした事があるのだと理解する。

「っ比等さんっ……！！そんな事言わないで、下さい。悲しいから……っ元と言えば、私のせいです。……そうだ、人質を私と交換して下さい！！」

「いゃぁよ。あなた、武術かじってるでしょ。それにそんな綺麗な顔で近付かれたらこっちがたまったもんじゃ無いわ」

確かに。オレ、既にくらっときてるもん。

危険だ。

合わせる顔無いし。

「ウィル……。ありがとう。君にそう言われると、凄く嬉しい。でもね？ウィルが傷付くよりオレが傷付いた方がオレは良いの」

「良くないです！！あなたが傷付いたら……私は、傷付けた人を許しません。きっと……殺めてしまう」

あれ？

「ウィル、ありがとう……愛してるよ」
「比等さん、私もです！！」

あれぇ？ナニナニ、何があったの、この二人。

「ウィル！！」
「比等さん！！」

ええええ！！
どうしよう？

助けを求めるようにミマリアを見るが、

駄目だった。

忘れてたぜ。

ミマリアが。

腐女子どころか貴腐人の領域だって！！！！

彼女は、それはそれは嬉しそうに瞳をキラキラさせてよだれが垂れそうなのを我慢していた。

そうだっ、ユリは？

……駄目だ。

ユリは、先程の生徒会長に攻略されてしまった。

「ユリと言うのか。可愛いな」
「はぁぅ、花梨おねいさまぁ……」
「よしよし。可愛い可愛い。ちゅーしてやろう」
「おねっ、おねいさまっ」

……首領は？
そして首領は。
首領は。

「テメェもう死ねっ」

ルルィに痴漢行為をして蹴り飛ばされていた。

駄目じゃんっ、この組織！！！！

ダメダメ組織☆（後書き）

駄目じゃん！！
と自分でも突っ込みまくりました。

赤ずきんちゃん（前書き）

話しの展開が見えなくなったので、短編に逃げます（笑）

赤ずきんちゃん

赤ずきん：琉峡
オオカミ：憂麻
お母さん：至軟
おばあちゃん：領可
猟師Ａ：麻矢
猟師Ｂ：類香

これは赤ずきんちゃんを元にしたララによる妄想作品です。原作の世界観を大事にする方は戻るボタンを推進します。それでもおっけの方のみどうぞ→→→→

「りゅー……いや、赤ずきんちゃん、領がさぁ、オレがいじめすぎたせいで腰砕けになっちゃってな？見舞いに行ってきてくれないか」
「至軟にぃ……最早赤ずきんちゃんどこにもないよ？」
顎に指を添えて首を傾げている至軟、もといお母さんに赤ずきんちゃんは正当な突っ込みをしました。流石です。
「ほら、とりあえずアップルパイ持って行ってこい。憂麻には気をつけろよ。あいつ最近お前に会えなくてたまってるみたいだから、本物のオオカミよりよっぽど危険だぞ」
「だから……オオカミさんはオオカミさん。憂麻って言いません」

ぷんぷんしながらお母さんを人差し指でびしっとさして再び注意。
物分かりの悪いお母さんは本当に大変です。
何はともあれ、赤ずきんちゃんはおばあちゃんのお家へと向かう事にしました。

草ぼうぼうの道を歩きながら、赤ずきんちゃんは少し憂鬱な気分でした。先日会った時に愛しの恋人オオカミさんとケンカ別れのようになってしまったのです。
胸が苦しくて苦しくて仕方ありません。会いたいけど気まずい。仲直りしてオオカミさんとぐちゃぐちゃになりたいけれど、どうしたら良いのか分からない。
赤ずきんちゃんはとうとう涙を流してしまいました。
「ゆ…うま……会いたい、会いたいよぉっ！！……ふ、ぇえ…」
あまりの悲しさに大きな雫が頬を流れ落ちた時、赤ずきんちゃんを呼ぶ声が。
気のせいなのか……、オオカミさんの声だったような気が……。
「りぃ……りぃっ！！」
気のせいではありません、オオカミさんです。ケンカ別れのようになってしまったはずのオオカミさんが赤ずきんちゃんを呼んでいるのです。
赤ずきんちゃんは嬉しくてぱっと表情を明るくしました。
「ゆーまっ！！」

一方、家にいるはずのお母さんは……

ブーーーーン！！！！

なんと、バイクをかっ飛ばしていました。最早可愛らしいお母さん崩壊です。
キャラ崩壊にも程がある。赤ずきんちゃんの作者さん、ごめんなさい。
しかも家にいる時していた赤と白のギンガムチェックのエプロンはどこへやら。全く見あたりません。それ所か何故かオオカミコスプレ。自分を何だと思っているのでしょう。
「よし、この調子でいけば琉峡よりも先に着けるか」
この調子も何もバイクの方が速いに決まっています。このお母さん、ばかだねぇ。
「ばか言うな」
はいすみません。

どうやらお母さんは赤ずきんちゃんよりも早く着いて、おばあちゃんといちゃこらうふふするつもりのようです。赤ずきんちゃんをお見舞いに出したのは道端で会うであろうオオカミさんと仲直りしてもらうため。
何て優しいんでしょう。
「よっしゃ着いた」
お母さんはにやっと笑って、おばあちゃん家のドアをノックしました。
「おばあちゃん、赤ずきんよー」「はいどうぞ」
がちゃ。
「領、会いたかったぞー！！」
そう叫ぶとおばあちゃんに抱きつきました。
「のわー？！オオカミ、憂麻っ？！！……じゃなくて、至軟？」
「はい正解。ほら、このほうが雰囲気出るだろ」
びっくりしているりょ、おばあちゃん。開いた口が塞がらないとはまさにこの事です。
少し経って落ち着いてきた頃、質問をしました。

「お前お母さんの役だったんじゃねぇの？」
「だったぞ。けどな、このノリでいくとだな、領が憂麻に喰われちまうわけだ。オレとしてはそれはたえられない。だからオレがオオカミ二号になって二号が襲いに来た」
「めちゃめちゃだーー！！」
そんなおばあちゃんの叫び声は、オオカミ二号以外に届く事はありませんでした。

水鉄砲、もとい拳銃の銃口をおばあちゃん家に向けている人影が二つ。猟師Ａと猟師Ｂです。オオカミさんを退治しようと構えていたのですが……
「あれ……憂麻じゃなくて至軟だったよな？」
「うん……。至軟だった。て事は、お母さんがオオカミさんコスプレをしてるって事だから、退治しなくて良いん、だよね？」
少し戸惑いながら猟師Ｂは言います。猟師Ａはというと、すっかり疲れきった顔をしていました。
「……退治する気にもならない」
はぁ、とため息を小さくつきます。相当疲れているのでしょう。
「鬼畜だったら遠慮なく退治したんだがな……いや、あの節操なしにも遠慮は必要無いか」
かなり酷い事を何でもないように言います。これは日頃面倒くさい目にあっている証拠なのだと分かります。ご苦労な事です。
「とりあえず退治は止めだ。それにこんな水鉄砲で鬼畜と節操なしが倒せるとは思えないしな」
「……確かに」
琉峡、いや赤ずきんちゃん程では無いにしても、二人の武術もたいしたものです。返り討ちに合うのは目に見えています。

「やーめた」
「お、オレも……」

―続く。

どうしようこいつら……（前書き）

進まない展開。
次こそは……！！

どうしようこいつら……

駄目だ、こいつらに頼っちゃ。
せめて琉峡だけでも手土産に持って……！

一番楽に持ち帰れそうな小柄な少年。ターゲットは、投坂琉峡。

ぴくりとも動かない彼ら。
本当に強力な麻酔らしい。

その真ん中あたりにいる琉峡の元へ。持ち前の瞬発力で一気に距離をつめる。そして素早く抱き上げようと手を差し伸べたが――
彼に届く事は無かった。

本当に強力な麻酔をかけられている、そう思っていたのに。

「りぃは、あげないから」

オレをきつく睨みながら彼を抱き上げたのは。
名波　憂麻。
麻酔で寝ていると思っていたのに……。これは完全な誤算だ。

「……りぃをストーカーしてたんでしょ。んで売ろうとかも、考えてた」

「……」

何故？何故知ってる？

「何故、とお思い？その答えは、わたくしが持っています」

くすりとまるで嘲る様に笑う、一人の少女が隣の部屋のドアに寄りかかっている。長い髪をポニーテールにしている彼女には見覚えがあった。

「鈴払財閥の一人娘……」

「ご名答。答えは持っています。ですがお答えは出来ません」

……苛つく女だ。

その嘲笑い、さっさと引っ込めあがれ。

「それはお前が“鈴払財閥”の一人娘だという事と関係あるんだな」

「さぁ？」

「……ふん。人の神経を逆撫でするのが得意なんだな」

「あらよく分かったわね」

こいつをまともに相手にしちゃ駄目だな。自分がイライラするだけだし。

とにかく。
誰か一人はかっさらう。
かっさって、より高額な値段で売り飛ばす。投坂琉峡が駄目なら他を持って帰るだけだ。

「……おいウィル、話しが違う」

それに、今はこちらが優位。
強力な麻酔をかけられていると思いきや、名波憂麻は意識があった。
この分だと他もきちんと麻酔をかけているのか怪しいもんだ。

「麻酔、かけてないだろう？話しが違う。こちとら武器も持たずに来てるんだ。公正な取引だと言えない」

条件を破ったのはあっち。
だから、こちらが優位。
それに首領も気付いたらしく、表情を引き締めて相手を揺らしに入る。

「くっ、貴様」

揺らしに入ったのに。
せっかく優位に立ったのに。

「武器を所持してない？ふざけないで。だったら彼女の脚に挟んであったこれは何？武器じゃないんだ。玩具？」

先程の財閥娘なんて比で無いほどに嘲た表情をする……何だっけ、比等だっけ？
比等の手に握られているのは小型拳銃。いつもミマリアが左足の太股のガーターに挟んでいるものだ。

「嘘はやめてよ？」

にっこり笑う彼はいつの間にか体制逆転をしていて、ミマリアに拳銃を突きつけていた。
油断も隙も無い野郎だ。

「女性のスカートをめくりあげるなんてとんでも無い人ね」
「大丈夫だよ。オレが興味あるのはウィルの体だけ」

拳銃を突きつけながらこそりとミマリアに囁く。何を言ったのか、何故か真っ赤になった。

「何？まだ事は終えていないの？」
「うん、まぁね。この事件が片付き次第、手出そうかと思ってる」
「へぇ。あなた純情そうに見えるけれど……お腹の中、真っ黒でし

ょ」
「そんな事無いよ？……多分」

さっきから何をこそこそと。
……ミマリアが楽しそうだからあんまり純情じゃ無い内容なんだろうけど。

「はぁ……もう結構です。ルルィはあげます」

緊張状態とはかけ離れた空気だったその時、何故かウィルがそう言う。

どういう事だ、ルルィはあげるって……。

「――ねぇルルィ？お前は誰か好きな人が出来たんだね……彼の事が、好きなんだね？」
「えっ……」

どこか諦めたような、呆れたような表情でオレの事を見る。
この人は何を……。
ルルィはこの事を知られたくなさそうだった。オレの専門人身売買だし、ここは何とか誤魔化して――

「うん、好き」

……っ、

「ルルィ！！」

「ハヤキが好き。大好き。侯爵よりも兄様よりも、誰より一番好き。だから、ルルィを止めないで。止めてもハヤキと一緒に逃げちゃうけど」

いつも通り、淡々と。いつもより、はっきり大きな声で。

「……ルルィ……」

「ふふっ……かつての私なら、絶対に許せませんでしたが。あなたもルルィを大切にしてくれてるんでしょ？ルルィがあなたを大切にしているように」

容姿も声も綺麗過ぎて意識が遠のきそうだが、不覚だからと必死につなぎ止める。

「人を愛する事の素晴らしさに気付いちゃったんです」

甘々過ぎる事を平気で言うこの人の神経が信じられない。

胸元に左手を当てて微笑む。
それを見ていたミマリアがぶはぁっと鼻血を出してせっかくの美人っぷりを台無しにする。
武器を奪ったから安心したのか、比等がミマリアの元を離れウィルの元へ。

「誰を愛しちゃったのかな？」
「……んっ」

ちゅ、と優しく唇に触れて抱きしめる。

「オレじゃなかったら悲しいから」
「……さっき言ったじゃないですか……あなたが好きだって」

駄目だ！！甘すぎて意識飛ぶ。

「ねぇ、あの二人初めて会ったの何時？」
「ちょー最近」
「あらっ、なら一目惚れねぇうふふ」

しかも比成とミマリア仲良くなってるし。
どうしよう。

本来の目的は？
あんたら敵同士じゃ無いのか？

うーん、どうしたら……。

急展開☆

「しかし……ルルィとハヤキの件が解決した事と、我等の組織が金欠だという事に直接の関わりは無い」
そんな事を言う首領。
まぁ確かに。
「よって、誰か一人はかっさらうぐえ」
まだ諦めていないらしい首領にオレとルルィの渾身の蹴りが直撃。
彼女のピンヒールの下で身悶える首領。ざまぁねえな。
「ユリくん、ユリくんっ……今回は心配してくれないのかっ……」
「ユリは会長さんといちゃいちゃしてる。諦めた、らっ！！」
「ぐううえぇ」
ルルィの言う通り、ユリは会長にべたべた。
会長もユリが気に入ったらしく、あそこだけ無駄に妖しい雰囲気だ。
こういう時はひたすら無視に限るとオレはここ数年で学んだ。
妖しいと言えばウィルと比等の二人も負けていない。ひたすらにハグしまくってる。さっきのやりとりからしても、一段落したら確実に一組のカップルが誕生する事だろう。
「悪い事、したな」
「いいや大丈夫。だってこれでりぃが狙われる事は無くなる訳でしょ？」
「まぁ、な」
少しほっとしたような……何て言ったけ？データでは確か……
「憂麻」
「え？」
「タメで良いよ。歳は大体同じでしょ？ハヤキ？」
「……あぁ、そうだな」
オレのココロを読んだかのようなタイミング。やっぱタダモンじゃ無い気がする。

それでもひとあたりは凄く良い好青年、って感じだ。んでもってオレの勘からすると。
「投坂琉峡は憂麻の恋人だろ？」
「……」
びっくりしてる。
にしてもさ、ずるいよな。美人てのはどんな表情をしても様になる。ぽかんとしている表情も、くすっと笑う表情も、先程までの険しい表情も、不安そうな表情も。
「ふふ、よく分かったね。ハヤキにも、大事な人がいるから分かったって所？」
「んー……まぁ、そんな感じかな。それと、皆にも謝る。すまなかった。……本当は麻酔なんてかけられてないんだろ？解決したから起きたら？」
そのオレの声と共に少し戸惑いながら体を起こす四人。座り込んだままの者、立ち上がる者……こんな状況で寝てしまった者。
「あぁあ、領、寝ちゃった。可愛いなおい」
そんなに身長の変わらない領可を軽々と抱き上げる至軟。この二人もくっついてたのか。
そして腐れ大好きなミマリア様はと言えば――
「――――っ！！」
トマトジュースを業者さんに無断で製造しない様に必死なようです。とことん期待を裏切らない人だな！！
そして茶髪のロングが名波麻矢だったか？んで黒髪のくせっ毛クンが砕楽類香。
このノリで行くと、この二人もそーゆう関係なんだろうな。
でもさ。
「あんまりいちゃいちゃするとミマリアが凄い事になるから、出来ればあの二人には大人しくしてて欲しいんだが？」
「大丈夫大丈夫。あの二人は家以外では結構ドライ――――――？！」
「……おい憂麻。あれの何処がド・ラ・イ、だって？」

全然ドライじゃねえええええ！！！！！
「あ、あれええ？お、おかしいな」
熱烈なハグまでは良いとしよう。
だけどな……いや、ちゅーもまだ良いとしよう。
でも、でもな？人いっぱいいる中でシャツの中に手突っ込むのやめてくれる？名波家の次男さん？
「ぶっ」
もちろんミマリアはぶっ倒れた。

急展開☆（後書き）

まだ続きますが、この文化祭編（と言って良いのか）はあと少しで完結です！

本当に急展開ですが……汗

波乱はオワラナイ

『そっかそっか、お疲れ様』
電話先の尚輝のその声に何故だかほっとする。
比等学園に通う尚輝は、今回ホストクラブの方にヘルプで入ってくれた。いろいろ話しているうちに、いつの間にか頼れる人だなと思うようになっていた。
「本当、いろいろあって……」
『ふふ、まぁ売られちゃう所だったんだもんね』
事が事なだけに、あまり多くの人には事情を話していないのだが、この人なら大丈夫と確信した。
『綺麗だと大変だね』
「いやいやそれなら尚輝先輩もでしょ」
『え、何で』
そしてこの方、半端無く美人なんだけど全く自覚していない。困る事も多々ある、と苦笑いしながら語っていた比等の保健室の天使の気持ちがようやく分かってきた憂麻である。
「何でって。……まぁ良いですけど」
『？』
心底不思議ですオーラをびんびん感じるが、この際無視だ。
とにかく疲れがたまってるみたいだからさっさと寝るようにしろよ、と理事長に口うるさく言われている事もあり、尚輝とは軽く話しをして電話を切った。
琉峡はダブルベッドで小さな寝息をたてながら気持ち良さそうに眠っている。その横に腰掛けて頬をすっと撫でると、少しだけ微笑んだ様な気がした。

心臓がばくばくうるさい。嫌だけれどそれでも、私が何とかしなければ。
侯爵の事とか面倒事が沢山あるからと、片付ける為に一旦帰国した。けれど、いざ侯爵を前にすると……
「ウィル、ルルィは何処かな、ん？」
「日本です」
「へええ？どうして」
侯爵怖い、侯爵怖いです！！
始終背景に黒い何かを蔓延らせながら、笑顔を絶やさないおっかない彼へ必死に冷静なふりをして事を伝えた。
ルルィは人身売買を専門とする組織の一員に惚れてしまった事。
相手が相手な為に誘拐計画で駆け落ちもどきをしようとした事。
「……そう。それでウィル、君はどう思うの？」
「賛成です。ルルィは彼を本気で好きなのだと、よく分かりました。そんな彼らを離ればなれにさせるなんて事、私には出来ません」
本当はすっごく怖い。心臓が痛い。逃げ出したい。けど、比等さんの事もある。
侯爵のおっかない視線に必死に耐えながら次々と言葉を紡ぎ出していると。
「――そう。ウィルがそこまで言うなら、仕方無いかな」
認めてくれた。
ルルィと、ハヤキの事を。
「ありがとうございます。……それと私も……日本へ行きます」
「っ……どうして？」
ちょっと寂しそうな目をしているけれど、私は……比等さんが大好き。
「好きな人が出来ました。とてもとても、大切な――っ、？」
人です、と続けようとしたら、ぎゅうと抱きしめられる。ふわり、

と上品な彼の香りが漂って来て、胸が締め付けられるような。
「お前まで、いなくなるの。……私を、置いていくのか」
自分より少し低い位置にある彼の瞳には、不安がゆらりゆらりとしとしているのがよく分かった。
「私は……」
「侯爵。また、遊びに来ます。だから悲しまないで。私達以外にもいるじゃないですか。……あなたの身の回りの世話をずっとし続けていたフェンやレリィ……」
彼らなら、侯爵では無くあなた自身を見てくれるはず。私達よりも、もっと大事にしてくれる。
「ここまで私達を育ててくれた事、感謝します。あなたのおかげで、大事な人を見つける事が出来たし何より……生きている事が出来た。……ありがとうございます」

◇◇◇◇◇◇◇

比成祭はとにかくドタバタしたけれど、無事に終了させる事が出来た。憂麻、至軟、麻矢、それから琉峡、領可、類香。あいつらには迷惑をかけまくった、いやマジで。
憂麻のじゃあ一週間お休み頂戴、なんて普段なら許可出来ない要望も快く応えさせてはもらった位にな。
今は絶賛お休み期間中。どっか旅行行ってくるとか言ってたな。
比等とウィルは……絶賛ラブラブ中。理事代理を立ててその間に存分に愛を育むらしい。
オレはというとな？

仕事に追われてるよ！！疲れたよもう。
ちくしょー、オレばっか。
嘆きつつ書類に目を通しているその時、携帯が鳴った。
……メールだ。
何だ何だ？

――――は？

それは琉峡からのもの。
内容は

『類と領が事故に！類は集中治療室。領はまだ軽いんだけど目が覚めない！！』

まだまだ、波乱の予感。

波乱はオワラナイ（後書き）

かなり強引な気はしますが、文化祭編これにて終了です。次は……
何編か決めてないやWW
ただシリアスが漂う予感。

今まで読んで下さった皆様、本当にありがとうございました。宜しければ、愛歌シリーズに今後もお付き合い下さいませ。
さらに宜しければとある隠れシリーズも是非（＞Σ＜）
……まだシリーズにはなってないけど、今後はしていくつもりなので　汗

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4616k/

愛歌～アイノウタ～　（文化祭編）

2011年11月20日09時42分発行